
ザ・マッチョ

北 郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・マツチヨン

【Nコード】

N6423J

【作者名】

北郷

【あらすじ】

マツチヨとヒーロー好きのお宅女子高生が、通りすがりのお婆さんからもらった”プロテインX”により、無敵のマツチヨ（マツチヨン）になり、悪党をやっつける勧善懲悪もの。

スーパードライト物語 小説度0・01%

1袋 運命の変身（前書き）

このお話はフィクションです。全てを空想の世界のお話とお受け止め下さい。
くだらない話です。

1袋 運命の変身

少女は、一瞬の身体的な圧迫と微熱。そして、精神的な高揚と解放を感じていた。

心の熱き正義感が血流に溶け込み、猛スピードで全身を駆け巡る。両肩、腕、胸が、そして、お尻とお腹に太腿が……。

全身が心地よく締め付けられ、そして、ずしりとした重量感を感じる。

しかし、何故か体は心地よく軽い。

彼女は、体中に漲るパワーと、少々の熱苦しさを感じながら、緩やかに目を開いた。

心身の気持ち良さとは裏腹に自分の姿への驚嘆が、頭の先から付き抜けた。

「ギャーアアアー!!」

お気に入りのトレーナーは上腕二頭筋と三角筋により引き裂かれ、スカートは広背筋と腹筋に負け大腿四頭筋に引っ掛かり辛うじて、床に落ちることを免れている。

パンティーは可哀相な位に伸びきってパチンパチンだ。

少女の身体は、あっという間に浅黒い筋肉の固まりへと変身していた。

「いやっ、うそ、何これ、どうしようっ」

それでもまだ、半信半疑だ。

と言うよりは、信じられない。

信じたくない。

自分の変わり果てた姿に目眩で倒れそうになるが、必死に正気を保ち自分の部屋にある等身大の鏡の前に立ってみる。

瞬きを三回する。

瞳をまん丸に見開く。

もう一度気持ち良く叫ぶ。

「ぎえゝゝゝウオウオ！！！」

取り敢えず両目を瞑って叫んだ。

叫んで、もう一度目を開けてみる。

（夢でありますように）

が、姿は変わらない。

驚きで涙も出て来ない。

「ドへ、五ボ、ちんカリ@：★じんぼゝ+？＝」

頭が混乱してしまい、わけが分らないことを叫ぶ。

彼女は、一昔？いや、三昔前で言うムキムキマン。少し前で言うゴリマッチョになっていた。

ただのマッチョではない。マッチョ好きな彼女が、かつて見た歴代のマッチョ達とは全く比較にならない人間離れをした筋肉の衣に包まれている。

アニメの主人公にも負けそうにない抹茶。いや、マッチョになっ

ていた。

多分、”何とかハルク”や、”パイ”にだって……。
（ポ）

（う、うそ、い、いや、ちょっと、どうしよう……）
不安と恐怖が覆いかぶさるように襲ってくる。
襲ってくるのだが、何か違う。
全てを否定していない自分がいる。

なぜか？

美しい。美しいのだ。

しかも、その体は浅黒く光輝いており抱きしめたい。と言うより抱きしめられたい位に美しい。

でも、自分の体である以上、願いは叶わないのであるが。

それだけではない。

内心、変身願望の血が騒いでいる自分がいることに気付いてしま
う。

（もしかすると、私、変身出来るのかも！）

戻れなくなったらどうしようと言う気持ちと、変身出来るかもし
れないと言う期待にワクワクする自分が攻防を繰り返す。

そこに、彼女の叫び声を聞きつけた母親の呼び声が聞こえてきた。
階段の下からだ。

「マチ、どうしたの？何かあったの？」

彼女は、こんな体を、母親に見られたら、気絶されてしまうと思
い取り敢えず返事をする。

「何でもない」

（良かった声は変わっていない）

「あら、そうなの」

母親は、居間に戻って行った。

彼女は、再び鏡で身体を確認した。

自分の姿に親しみを感じてきた彼女は、どうしてもフェチである三角筋を確認してみたくなってきた。

早速、鏡に背中を向けて背筋を確認して見る。

両手を腰の辺りから後ろに回しポーズをとって見る。ちよつと力を入れてもる。

気持ちいい。その時。

（おや？背中になにか書いてある）

丁度、リンゴに”寿”と言う文字を浮き出させる為に、リンゴがまだ、青いうちに”寿”シールを貼ると、シールの部分だけが青いままになり、”寿”の文字が浮き出てくる。

今、浅黒くなった彼女の背中には、同じように”マッチョン”と言う文字が白く地肌にくつきりと浮き出ている。

「へっ！、マッチョン？マッチョンって何？」

鏡に映った姿を見ながら、こんな状況で何故か”そこ”に気持ちが悪きつけられる・・・。

伊藤真知 16歳。

友達からは”マッチン”と呼ばれている。

女子高に通う1年生である。

運動も、勉強も性格に関しても特に可もなければ不可もない。ちよつと背が高めなことを抜かせば極々一般的な女の子だ。

そんな彼女にも、絶対に譲れないものがある。

それは正義に対する忠誠心だ。

彼女は幼い頃から、アニメや特撮系、時代劇等の正義ものをこよなく愛して観てきた。

その御蔭で、すっかり登場するヒーローに感化されてしまったのである。

彼女は、”かつてヒーローものを観ていた人間が、悪いことをする”と言うのが全く信じられないでいる。

そんな奴らは、ヒーロー達に対する裏切り者であるとさえ思っている。

いつか自分もヒーローになって、裏切り者達をバツバツとやっつけてやる。

と、そんな空想を描いているのである。

当然、彼女の趣味もアニメや特撮系、時代劇等の正義ものの鑑賞や、ものまねだ。

自分の部屋の中で、好きなヒーローの台詞や、動きを忠実に真似をしては一人で感動している。

特に、正義のヒーローが、最終回に自分の身分をあかすシーンに憧れており、暇があれば部屋の中で一人芝居にに酔いしれるのである。

一言で言えば、ただのヒーローお宅であると言える。

さらに彼女には、もう一つ全く現実離れたヒーロー意外にも興味を持っているものがある。

それは、”筋肉”である。

それも、ゴリゴリのゴリマッチョが大好きなのである。

毎月発行される”ザ・月刊マッチョ”は写真が多いため若干高い

のではあるが3年前から欠かさず購入しているのである。

ヒーローお宅であることは、世間の女の子にも結構存在するので特に隠そうとはせず、周知の事実ではあったが、マツチヨ好きに關しては、誰にも言うことが出来ずひた隠しにしている。

マチは、変わっているだけではなく、一応世間体も考える。
そんな女の子である・・・。

今日、マチは学校帰りに、道を聞かれた。

腰の曲がつた80歳過ぎのお婆ちゃんである。

お婆ちゃんは、ウォーキングバッグを杖替わりに、マチの半分にも満たない位のスピードで、きよろきよろと、探し物をするかの様に歩いていた。

ヒーローものをこよなく愛し、正義感の強いマチは、困っている人を放っておくことが出来ない。

お婆さんが寒い中、道に迷っているのではないかと思うと、このまま通り過ぎてしまうことに罪悪感を感じてしまうのだ。

マチは、いつもの様にごく自然に、お婆さんに話掛けてみた。
すると、お婆さんは駅に行く為のバス停を探しているとのことだった。

マチにとつては、道案内をすることなどは、何の苦痛でもない。
むしろ、色々な人と知り合えることが楽しいことなのである。
マチは、お婆さんをバス停まで連れて行き、バスに乗せてあげることに決めた。

マチは、お婆さんと停留所に着くまでの間や、バスが来るまでの間に、色々な会話をした。

と言うよりも、マチが一方的に自分のことをお婆さんに聞いても

らっていた。

自分が筋肉モリモリのマッチョが大好きで、誰にも内緒なこと。小さい頃から、ヒーローものの特撮が好きで、ヒーローに憧れていること。

マチは、身振り手振りを駆使しながらずっと話続けた。

お婆さんにとっては迷惑かもしれないようなことではあるのだが、お婆さんは、とっても聞き上手で楽しそうに聞いてくれる。

マチも学校の友人にヒーローのことを話すと笑われてばかりなので、嬉しくなってしまう、ついつい話が止まらなくなってしまう。そして、最後にヒーローものの最終回で自分の身分を明かすシーンに憧れていると言うことを話そうとしたその時、残念ながらバスが来てしまった。

「ありがとうね。助かりました。楽しかったわよ」

お婆さんはにこやかな顔でお辞儀をする。

そして、ウォーキングバッグの中から、漢方薬が入っていそうな小箱を取り出してマチに手渡した。

箱には”プロテイン X（ヒーローペプチドコラーゲン配合）”と書かれている。

「この中には、20袋入っているんだけどね。1袋だけ、赤色の帯が印刷されているのがあるから、それは飲まない様にね」

そう言ってお婆さんはバスに乗ってしまった。

「ありがとう……」

余りに急で、お礼を言うのが精いっぱいであった。

マチは夕食の後で直ぐに自分の部屋に戻り、お婆さんから貰ったプロテインXの外箱を手にとった。

「プロテイン X（ヒーローペプチドコラーゲン配合）か」

裏側を見ると、説明書きがあったので、読んで見ることにした。

「用法容量」か、何々。

「1日1回1袋まで」。ハイハイ。

「熱くなったら1袋を水によく溶かしてお飲み下さい」。
「熱くなったら？熱くってどういう意味何だろう？」暑く「じゃないんだ」

マチには意味が分らなかった。

が、首を傾げながらも次を読むことにした。

「それで、

”効能効果”は、えーと

”漲るパワーと、溢れる闘志で、悪党どもはバツバタ。効果は5秒で現れ、気持ちが続けば15分間持続します”

???

なん、なんじゃこの説明書きは。意々味が分んない」

マチは、プロテインXの箱を机の上に無造作に置き、テレビのスイッチを入れた。

マチの大好きな”見て肛門”の時間だ。

”見て肛門”は勧善懲悪の時代劇で、番組の終盤で肛門様の家来

である”透けさん”と”隠さん”が悪党共をバツタバツタとなぎ倒すと言う番組である。

マチは、いつ観ても興奮の余りテレビの前で暴れてしまう。その為、この番組だけは必ず部屋で一人で見るのだ。

今日も番組の終盤、丁度”透けさん”が最後の締め印籠を見せ、悪役に印籠を渡しているところであった。

いつもであれば、ここで全てが解決するのだが、今は19時42分。今日はいつもより3分早い。

何と悪党共が、肛門様にいやらしい手を出そうとしたのだ。

マチの怒りは絶頂に達した。

頭に血は昇るは、体は熱くなるは。

やり場のない怒りが込み上げてくる。

マチはすっかり熱くなった！

熱くなった瞬間にプロテインXの説明書きのことが、ふと記憶の引き出しを開けて頭を横切った。

（熱くなったら・・・悪党バツタバタだ。飲んじゃえー、ってか。）

熱くなっているマチはあまり深く考えず、プロテインXを一袋取り出した。

そして、机の上にある半分位残っているペットボトルのお茶に、それを入れると、よく振って一気に飲み干した。

その結果が、背中に”マッチョン”と言う文字を白く浮き出した、浅黒い筋肉の塊である。

（マツチヨンって何だろう？
マツチヨのことだろうか？）

背中の文字は気になるが、筋肉の塊となり、鏡の前に立ってしま
うと、取りあえずポーズを取らずにはいられない。

筋肉マニアの性でる。

ボディービルダーの様に色々なポーズを楽しむ。
すっかり、自分の今の状況を忘れてしまっている。

マチの一番お気に入りのポーズは、片足の膝を地面に付け、もう
一方の足は膝を立てる。両手で力瘤を作り45度腰を回して、鏡を
覗く。

三角筋から、僧帽筋から、上腕二頭筋三頭筋にかけてがたまらな
く美しい。

下腿三頭筋と、大腿筋の盛り上がりを確認して「ニッ」と笑って
みる。

「思わず、抱かれない」と呟いたその瞬間から……。

見る見ると筋肉が落ち始めた。

微熱からは目覚め、気持ちちは平静を取り戻し、血流は穏やかにな
る。

身体から重量感は消えるが、返って体は重く感じる。

オイルを塗った様なテカりは消え、浅黒かった色はすっかり褪め、
白くなる。

そこには色白のほっそりとしたAカップダッシュの女の子が、ぶ
かぶかになったパンティー一枚で片膝を付いている姿が鏡に映しだ

されている。

いつもの自分だ。

（寝ぼけてたのかな？）

しかし、引き裂かれたトレーナーと、ずり落ちたスカートが事実を物語っていた。

あと、ぶかぶかになったパンティーと・・・。

<つづく>

1袋 運命の変身（後書き）

ネタが無くなり、おもいつきくぐらないものを書きたくなくなってしまいました。

2袋 治験者は兄（前書き）

マチは、謎の薬（プロテインX）でムキムキのマツチヨになったが、15分程度で元の姿に戻ってしまった。

本当にプロテインXが原因であるのか、兄の一樹を治験者とするのであった。

その結果・・・。

2袋 治験者は兄

「あつれ〜？戻っちゃった」

丁度調子に乗ってポージングをしていたところであった。

ホツとするはずなのに何かちよつと寂しさが残ってしまう。

それに、マッチョンの大胸筋の方が今のマチの胸よりも明らかに大きかった。

（胸・・・硬いかな・・・）

後悔が残る。

（いったい今の何だったの？昼間のお婆さんから貰ったプロテインXのせい何だろうか？）

マチは、もう一度プロテインXの箱を手に取り説明書きを読んで見める。

「掻い摘むと、熱くなったら1袋飲んで、5秒で効果が現れ、最大15分持つ。そして悪党共はバツタバタって言うことか」。確かに悪党がいれば、そのままなんだけど・・・」

確認はして見たい。

でも、もう一回自分で飲むのはちよつと怖い気がする。

（実験が必要だ！）

マチは少し考える。

すると、名案を思い付いた。

「そうだ、兄貴で試してみよう！」

マチは、プロテインXの被験者に兄を利用してやろうと企むのであった。

マチの兄、一樹は、4歳違いの大学3年生。

高校生の頃の一樹は、水泳部で見事な位に身体は逆三角形をしており、顔もワイルドで、マチの理想の兄であった。

それが、大学の入学と同時に怠惰な生活が顕著に体に現れ、高校生の時の姿は見る影もない。

顔も温和に丸っこい。

マチにはそれが残念で仕方が無かった。

「ん」唸る。

しかしだ、マチにはこの兄の一樹を利用するにあたり、大義名分が必要なのである。

それは、マチが正義を愛するものであるからである。

理由もなく人体を実験に利用することは出来ない。これでは、悪の科学者の人体実験と同じになってしまう。

それでは、正義の味方にやつつけられてしまう。

昨日DVDで観た、手のひらに毛の生えた怪人のように・・・。

つまみ食いをするとき口の中に毛が入ってしまう。

手相占いが出来ない。

盲パイが出来ない。

手のひらを太陽にかざしても僕の血潮が見えない。

それはまずい。

正義と言う名の大義名分が絶対に必要だ。

(そうだ！大義名分があればいいんだ)

大義名分があれば何をしても良いのかと言う疑問については、この際目を瞑ることにした。

マチは両目を閉じる。

よし、疑問が見えなくなった。

そういうことにした。

（でも、大義名分はどうでしょうか？）

マチは思案する。

「ん」唸る。

何か、取ってつけたようなものでも良いから、大義名分が無いものか・・・。

（いや、取って付けたものでは良くない。必要不可欠だと言う理由が必要なんだ）

それっぽいものを探す。

（よし、マンネリな午後3時のひとときに、妹からの刺激的なスパイスのプレゼントにしよう）

”刺激的なスパイスのプレゼント”と言うのが、大義名分になるかには、大いに疑問も残るのだが、それも目を瞑ることにした。

これで、取り敢えず自分を正当化することに成功した。

（さて、次はどう飲ませるか。そして、どう熱くさせるか？か・・・）

「ん」唸る。

マチは思案する。

しばし・・・。そして、

「うん！」

ポン。

広げた左の掌を、右手の拳が気持ち良く叩いた。
マチはワクワクしてきた。

ちよっと別の意味のよこしまなワクワクである。

そして翌日（土曜日）

一樹には、高校1年生の時から付き合っていた彼女がいる。

彼女の名前は、菜茅^{なち}と言う。

マチは彼女のことを” なっちゃん ”と呼び、彼女はマチのことを” マツチン ”と呼んでおり、二人は本当の姉妹の様に仲が良い。

菜茅は、毎週のように土曜日の昼頃になると伊藤家（マチの家）にやって来ては、午後3時から夕食までの3時間を一樹と二人で、部屋に閉じこもる。

マチとしては、昼食後から午後3時までにプロテインXを兄の一樹に服用させなければ治験を成功に収めることが出来ない。

それにしても、最初は嫉妬心もあったマチではあるが、最近はこの毎週欠かさずのお勤めに、

（御苦労さま！）

内心、呆れた様にエールを送る。

ラジオ体操だって夏休みの終わり頃には飽きるのに・・・。

最後の深呼吸何かは4回も行うのは面倒臭くてしょうがない。

（兄貴ってそんなにいい味してるんだろ？あのブタ）

今のマチは、太った兄に余り興味が無い。

ビジュアル重視だ。

そして、今日も菜茅は正午の鐘の音と共にやって来た。

週末の伊藤家の食卓はいつも、母、マチ、一樹と菜茅の4人である

一樹が大学に入学して依頼、変わらぬ顔ぶれだ。

因みに伊藤家の父は土曜日も仕事である。

昼食の後は、お茶とお菓子による談笑というコミュニケーションがいつものパターンである。

通常は、母と菜茅で準備をするのであるが、今日はマチがバナナシェークを作ると言うことで、お茶係りに立候補した。

「珍しいこともあるもんだと」言う一樹の声と、母の嬉しそうな声

援に送られ、見事にキッチンに立つことに当選した。

マチのレシピは、まずミキサーにバナナと牛乳、それにアイスクリームも入れる。そして、スイッチON。

3人分が完成した。

そして、残りの1人。兄の分には、さらにプロテインXを1袋加えミキシング。

袋をポケットから取り出すと、ドキドキしてきた。

興奮で、お尻の筋肉がピクと持ち上がる。

目付きは、悪人の様に細く鋭くなって来た気がする。

マチは、慌てて瞬きをして、鏡を見つめる。

（大丈夫、真ん丸な大きな眼だ。可愛い）

バナナシェーク4杯はあっという間に完成した。

それにカステラを添える。これは市販のものだ。

それっぽくなった。

完成度に膝頭が内側に寄って力が入る。

（ダメだ、興奮する）

しかし、バナナシェークを運ぶ間際になって、マチの良心が問いただしてきた。

（正義を愛するものとして、兄を犠牲にすることが本当に正しい選択なのだろうか？）

ハッとして、バナナシェークとカステラを乗せたお盆を持ったまま暫し立ち止まる。

そして、

（世界平和の為には、多少の犠牲はあるものなの。きっと兄貴達にも刺激があつていい経験に・・・）

再び、目付きの悪い悪人の様になって来た気がして、慌てて瞬きをした。

マチは、納得して再び正義の階段を一步踏み出した。

マチのバナナシェークはかなりの好評を得た。

一樹は美味しそうにそれ（+プロテインX）を一気に飲み干した。

・・・穏やかな団欒が続く。

陽の傾きが気になりだした頃、居間の時計が三回鐘を鳴らした。二人は、さり気無く2階の一樹の部屋に向かう。

2年半もの間積み重ねた二人の行為は、必然の流れに乗り、ラベンダーの香りまでが漂ってきそうである。

5分後、マチもさり気無く隣の自分の部屋に移動を開始する。

これも、何故か必然になってきている。

興味は既に無くなっているのだが、ホントに興味はないのだが、ラベンダーの香りが大好きだ。

と思う。

誘われてしまう。

特に今日は、プロテインXの香りが混在している。

気がする。

興奮の香りだ。

きつと。

自分の部屋に戻ったマチは、壁にメガフォンをあて耳を寄せる。必要もないのに息を潜める。

ごそごそと音がして来た。

（いいぞ）

始まった。

（そろそろ変身かな？）

マチは耳をメガホンに押し付けた。

「はー」

「ひー」

（いけ！変身だ）

「あー」

「いー」

でも、いつもの音しか聞こえてこない。

いつも聞いていることになるが。

壁越しに伝わってくる何年経っても変わらぬ愛に、多少のイラつきを覚えながらも聞き耳を立てる。

（あれ、もしかすると、熱くなっていないのだろうか？）

いや、そんなことはないはずだ。工場の始業時間じゃあるまいし、午後3時の鐘の音と同時に行動を開始している。

熱いはずだ。

なのに、なのにいつもと変わらない。

マチには、とってもマッチョンとなっちゃんのタイトルマッチには思えない。

どう考えても、兄の一樹と、なっちゃんの30分1本勝負だ。

そんなことを考えているうちに、静かになり、会話が聞こえてきた。

終わった様だ。

余韻が伝わって来る。

会話の内容までは聞こえないが、特に興奮をしている様ではない。

『何も無かったのか？』

マチは菜茅に率直に聞いてみることにした。

そして夕食前

「ねえ、なっちゃん。兄貴変わってなかった」

「えっ、変わってたって。どういう風に？」

菜茅の顔は若干赤くなっている。

「その、何ていうか体がこう、ほら昔の様にマツチヨと言つか・
・」

「特に変わったことは・・・」

昨日マツチヨンになったのは、プロテインXのせいでは無かったのだろうか。

それとも、熱ければ何でも言い訳でないのだろうか。

これでは、プロテインXの力が不明のままである。

それに、

「凄くなかったんだ」

凄い行為を期待していたマチは残念な気持ちになる。

「あっ！そう言えば」

「えっ！何か違ってた？」

菜茅の記憶が、一樹の頭の天辺から爪先に向けて、ゆっくりと体を舐める。

そして、体の中央を若干過ぎたあたりで、菜茅がつぶやいた。

「そう言えば・・・いつもより、マツチヨさんになっていたかも」

「ホント！！どんな風に？」

マチが食いつく。

そこに、

「どうした？」

声を掛ける一樹の前には、キラキラと輝いた眼付きのマチと、顔を赤くして口を押さえる菜茅がいた。

（プロテインXの効果だろうか??）

マチの謎は深まるばかりである。

<つづく>

3袋 マッチン&なっちゃん(前書き)

マチは再びプロテインXを飲む決心をする。しかし、いざとなるとなかなか飲む勇気が出ない。
そして・・・。

3袋 マッチン&なっちゃん

兄への治験の結果は、結局のところ感じな部分が分らずじまいであった。

しかし、少なくともマチが変身した様なマッチョにはならなかったのは事実である。

（ただ、極一部分に関してはマッチョになった疑い？ は以前として残されてはいるが・・・）

それでも、マチに取って兄がプロテインXを飲んでも身体的な障害が出なかったのは収穫である。

（もしかすると、極一部分に関しては身体的な好結果が得られた可能性も以前として残されてはいる…）

マチ自らが、もう一度プロテインXを飲む勇気が出てきたのである。

それに、副産物としてもう一つ収穫があった。

休日の余興としては、そこそスリルがあって結構楽しかったということである。

もしかすると、マチにとってはこちらが真の狙いで、治験の方は後付けの理由だったのかもしれない・・・。

いづれにしても、今後の兄にとっては不幸な生活がまっつていそうである。

マチは、自分の部屋のベッドに転がり、プロテインXの外箱をもう一度眺めてみる。

「ヒーローペプチドコラーゲン配合か」。ヒーローになれそうな名前だよな」

そこは、何が配合されているようがさして問題ではなく、結果が全てではある。

しかし、”ペプチドコラーゲン”の前に”ヒーロー”の文字が入っていると、自然とそこに目が奪われてしまう。

「ペプチドコラーゲンは聞いたことはあるけど、ペプ コーラと何か関係があったけ？・・・いや、コラーか。関係ないっかー」無意味な思考は止め、ベッドから起き上がり、鏡に背中を向け服を捲つてみる。

もう”マッチョン”と言う文字は、影も形もない。

「確かにマッチョンって浮き上がったけど、あれってホントに変身した時の名前なんだろうか」

色々な疑問が小山を築きつつある。

捲った服を戻し、大胸筋に力を入れてみる。

ピクリとも動かない。

ぶるるんもしない。

「さすがAカップダツシュってとこか」

マチ的には、Aカップブラを2枚重ねにすることがAカップダツシュである。

上腕三頭筋など、プルンプルンのこんにやくのようだ。

(こっちは、ブラが必要ってかい？悲ピー現実・・・)

マチは再びベッドに寝転がる。

「マッチョンかー」

変身したときの姿を思い出す。

マチは思う。もし、もしもだ。この薬で自由にあのマッチョンになれば、きっと何か出来るはずである。

まだマッチョンの実力がいか程かは分らないが、変身した本人にしか分からない感覚が脳の一部に、しっかりと刻み込まれてしまっている。

でも万が一、今度飲んだ時に”ぶっちょん”とか背中に浮き出てメガトン肥満のまま戻らなくなったらどうしよう。

或いは、巨乳なるとか、一気に歳をとるとか・・・

（巨乳は、まあ・・・結構いいか）

色んな不安が下痢の時の腹痛の様に押し寄せては消える。
繰り返す。

マチは、思案すること暫し・・・。

「考えるより感を得る」だ！」

（マチが考え出した座右の銘で、”頭の悪い奴は、考えるより感で動いた方が得ることが大きい”と言う意味である）

「あのお婆さんを信じよう。そうだ！飲もう！とことん」
しかし、外箱には、1日1回1袋までと書かれている。

（慌てることはないか）

マチは、もう一つのキーワード”熱くなったら・・・”の部分を満たす為の準備をすることにした。

（熱いと言えば・・・何だろ？）

自問する。

（熱いと言えば、お風呂。追い炊き。鍋焼きうどん？）

自答する。

さらに、

（スポーツ。プロレス。ボクシングにテニスの選手、一部の？）

さらに、

（後は、怒り親父に、エッチ。それに、何てったってヒーローものってとこかあ）

だが、ヒーローものは恐らく、”見て肛門”を見ている時に一度変身しているので、また変身出来る可能性は高い。

エッチに関しては、兄貴が変身出来なかったことによって可能性が低いと予想出来る。

部分的には未知数だが・・・。。。

マチは、可能性の低い順で、試すことにした。

1．45度のシャワーを浴びる

2．毎月購読している”ザ・月刊マツチヨ”を見て、ちよつとだけ一人遊びをする

3．プロレスのポスターを見て気合いを入れる

4．”ヒーロー単体 ゴレンチャン”のDVDを観る

このゴレンチャンは、最近のヒーローものではマチが一押しにしているものだ。

普段は気の弱い振りをしている雀士が、悪徳金融業者を麻雀で裸にひん剥いてしまうヒーローものアニメだ。

すっかり準備が整い時計を見ると、午後11時55分を既に回っている。多少のことでは傷つかないステンレスのような丈夫な心臓をしているマチも、さすがに緊張が襲って来た。

口が渴く。

心臓がの鼓動が、頭に反響する。

膝の間接が緩む。

膀胱様が尿が溜まつてると知らせてくる。

マチは心臓に手を当て、下唇を舐めた。

（金鳥の夏か？今は、緊張の冬だ）

部屋の時計が午前0時を告げる。

マチはそれを合図に、ペットボトルの”才色兼備茶”のキャップを回しゴクリと二口飲む。

流れ作業の様に、何も考えないようにして、プロテインXの小袋を開き、”才色兼備茶”のペットボトルに入れた。

心臓の音を意識しない様にするが、勝手に頭の中で響いている。

（こんな、気の弱いことでは正義の味方になんかなれないよ）

自分を叱咤する。 キヤップを締め良く振る。

そして、キヤップを開けると、目を瞑って一気に……。ちよつと躊躇う。

（慌てることはないよね）

やっぱり、言い訳をする。

何度か、口まで持つて行くが、飲む勇気がでない。

マチは、少し休憩をして、テレビを観ることにした。逃避である。

テレビを点けると若い素人の女の子と、中年のオヤジ芸能人が対談をしている。

結構面白い。

マチは、お茶を飲みながらテレビを楽しむ。

恋愛の話に移ると、次第に話は盛り上がり、若い女の子が1年に5人と付き合ったとか、現在3又を掛けているとかとほざいている。それを聞いている中年のオヤジ芸能人が一応仕事なので怒りだす。マチも最初は、面白がって見ていたが、次第に正義の血潮が疼き出し腹が立って来た。

お茶を呑みながら……。

中年の芸能人が立ちあがる。

マチも、熱くなり一緒に立ちあがる。

才色兼備茶を飲みながら……。

「あれ？」

身体が、むずむずする。 お茶を飲み干す。

微熱を感じる。

お茶を見る。” 才識兼備茶” とラベルが貼られてい。血液の物凄い流れを感じる。

机の上を見ると、空のプロテインXの袋がある。

身体が圧迫されて来た。

「やばい、破ける！」

マチは、慌てる。

慌てて着ているものを脱ぎパンティー1枚になった。

1拍おいて、

パンティーも脱ぎ棄て生まれたままの姿・・・？

とは、一部生長して異なっではいるが全裸になった。

精神的な高揚と解放を感じ、

そして、

ズドーン。

” マッチョン” に変身した。

「うお、うお、お」

2回目の変身とは言え、マチは声にならない呻き声をあげる。少し煩い。

驚きで、テレビの前に立ち竦む。

そこへ、絶妙なタイミングで扉の外から声が掛けられた。

「どうしたのマッチン」

隣の兄の部屋でお泊りしていた菜茅がトイレに起きて、戻るとこ

ろであつた。

菜芽は、明日が祭日で休みの為、めぜらしくお泊りをしていた。昼夜の連戦のせいで、ちよつとお疲れではあつたが、マチの変わった叫び声を聞きつけ、心配になり声をかけたのだ。

「はい？」 と、驚いたマチは聞きなおしたのだが、疲れの残っている菜芽には、返事に聞こえた。 扉が開かれる。

マチには、スローモーションの様にゆっくりと見える。

菜芽の右半分が見えた。

まずいと思つたマチは、菜芽に向つてダッシュする。

菜芽の眠そうな眼がまん丸く開かれる。

そして、スローモーションの様に口が大きく開いたその瞬間。マチの右手が菜芽の口を捕らえた。

間に合つた。流石、マツチヨンに変身すると俊敏だ。

マチは菜芽を引き寄せ、慌てて扉を閉めると、しゃがみ込んだ。

「ウゴウゴ・・・」

「なっちゃん。お願い静かにして」

体はかつて見たことがないゴリゴリのマツチヨだが、間違いなくマチの声だ。顔もマチである。 菜芽がウンウンと頷くので、マチは菜芽の口から手を外した。

「ど、どうしたんですか！裸で」

驚いて敬語になっている。

「あのゝえゝそのゝ・・・」

マツチヨになってどうしたのかと聞かれると、説明し易いが、裸でどうしたのかと聞かれると答えにくい。

「マツチンって、凄いで着痩せするタイプだって知らなかったから驚いちゃいました」

菜茅は、人間が瞬時に変身すると言う概念が無い。

マチが元々マッチョ体系であることを、自分が捉えられてなかったと思いこもっている。

「なっちゃん違うの。これには深い訳が・・・」と話しかけたところで、胸に熱いものを感じる。

（なんだ、この熱きものは？）

内側からではない。外側からだ。

大胸筋辺りにもそもそとした・・・。

マチが自分の胸を見てみると、なっちゃんの左頬は、マチの右胸にぴったりとくっ付き、右手は左胸を滑るようにすりすり・・・。

そして時々、マチの突起物を心地よく捕らえる。

「あっ、なっちゃん！」

慌てて突き放す。

マチは心配した。

菜茅のことではない。自分の清潔さについてだ。

菜茅はさつきまで、隣の部屋で兄貴の『お兄様』を握っていた、または、すりすりしていたはずだ。

毎週のように壁越しに盗聴しているので、大体の動きは想像がつく。その手で触られたと思うと、ちよつと冷たく汗ばんでしまう。

「その手は。あの〜」

幾らマチでも、ちよつと言にくい。

「ごめんなさい、あまりにもいい大胸筋だったもので・・・つい」

菜茅は自然と出てしまった障壁に顔が真っ赤になる。

当然、胸を触ったことについて責められていると思っている。

胸を大胸筋と言っただけあって、菜茅は、マチと同じく隠れマッチ

ヨ好きであつた。

元々、マチの兄一樹と付き合いだしたのも高校の時の兄の大胸筋を好きになった為である。

「マッチンって、一樹より良い体しているんですね」

目つきが、トロンとして来ている。

（完全に勘違いされている。早く説明しないと）

と思つた瞬間だつた。マチの体はみるみる内に、元の華奢な体に戻つて行つた。

全裸の女の子が恥ずかしそうに……。いや、堂々としゃがんでいる。その姿を目の当たりにして菜芽は腰が抜ける程驚いた。

「マ、マ、マ、マッチ……ン」

マチは、また慌てて菜芽の口を抑えると、一気に畳み掛ける様に今までの説明をするのであつた。

- 説明 -

なかなか冷静に事実を受け止められない菜芽であつたが、何度も反復することにより、脳みそが馴染んできたのか、菜芽も冷静を取り戻してきた。

菜芽が右手の親指と人指し指で、OKマークを作つたので、マチは菜芽の口からてを離した。

「驚きました。そうですね、そんなに着痩せする人はいないですよ。ホントは自分の目がおかしくなつたのかと思ひました。でも、こんなことつてあるんやねーって感じです」

菜芽は、この後数年の間4歳年下のマチに対して、敬語を使うのである。

「なっちゃん、このことは……」

「もちろん、誰にもいいません。一樹にも」

こうして、マッチョンのことは、マチと菜芽だけの秘密となつた。

変身についても一つだけ間違いのない次の法則も掴めた。

「（変身） （マチがプロテインXを飲む & 町が怒って熱くなる）」

菜芽に説明を終えた、全裸のマチは、取り敢えずパジャマだけは着ようと、菜芽に背を向けパンティーを穿こうと前屈みになった。すると、何やら熱いものが後から突き刺さる。

熱いものに悪寒が走る。

（何だろう）

自然な仕草の中で、後ろを見ると、菜芽がじつとマチの足の付け根あたりを興味津々の目付きで凝視している。

（見られる！！！！）

マチは、大きく隠す行為を行う度胸もなく、一応見えない様に、斜に構えて、素早くパンティーを穿くのであった。

この後、二人は“彩色兼備茶”を飲みながら、正義とマッチョについて語り明かすのだった。

ついでに菜芽は、トイレの帰りにマチの部屋に寄ったことが分り、「トイレの帰りなら、手を洗ってるか」と、安心するマチであった。

伊藤真知 （マッチョン）

16歳 高校1年生

身長164cm 47kg

細身で、ハートが熱く、強い。心臓はステンレス製。

正義感が強いが、ちっちゃなモラルはワカチコ。

筋肉とヒーローを愛する。

マッチョンのサポーター

山倉菜芽

20歳 大学2年生

身長148cm 40kg

幼く見え、気が弱いが、時々大胆なことを行う意外性の女の子。
マツチヨが大好き。

愛車は、中古で買ったグレーの地味な軽自動車。
運転中と、麻雀中は人が変わる。

< つづく >

4袋 正義の不審者（抽象的に備えあり）（前書き）

マチは、謎の薬（プロテインX）でムキムキのマッチョのヒーローになることを決意した。

しかし、なかなかそんな機会には廻り合わない。

次第に、気持ちが薄れていく中、ついに大事件に遭遇してしまった。

4袋 正義の不審者（抽象的に備えあり）

数日後・・・

あれから、マチは毎日お気に入りの真つ赤なお財布の中に、”プ

ロテインX”を1袋。鞆の中には、

さいしょくけんびちゃ

“彩色兼備茶” 300mLのペットボトル1本を欠かさず持ちあ
っている。

マチは、それをヒーローとしての心が構えだと信じている。

備えあれば憂いなしだ。

しかし、そんな簡単にヒーローを必要とする出番が廻って来る訳が無い。

そんな簡単にヒーローが必要な世の中では堪ったものではない。

最初は、ドキドキわくわくしながら事件の匂いを嗅ぐべく、意味がないのだが鼻を突き出して歩いていったマチではあったが、しだいに世間に流れる穏やかな日々に、駆出しのヒーローの気分は次第に削がれていった。

ヒーローとしては、喜ぶべきことではあるのだが・・・。

そして、何だかんだで一週間が経過した・・・。

なっちゃんは、その後もあいも変わらずルーチンワークの様にマチの家に訪れ、父を除くマチ家の面々と一緒に昼食を取り、そして、兄との午後3時の営みをひた向きに済ませている。

マチも2年半のルーチンワークの様に自室に戻りメガフォンを手に取り、ご拝聴を行う。

いつもと変わらない日々を送っている。

ちよつと変わったことと言うと、夕食前になつちんが”ヒーロー
ペプチドコラーゲン”とか何とか言葉を発し、変なポーズを取って
来るくらいである。が、マチは軽くないなしておいた。
なつちんは、まだ、気分が盛り上がっている様だ。

（さすが、鮮度がいいと日持ちがいい）と、マチは思った。
なつちんは、子供の様に無邪気だ。

午後１０時、今日もなつちんは嬉しそうな笑顔を見せながら帰っ
て行った。

平穏な日々がさらに数日が経過した。

ある日。

事件は起こった。

マチは授業が終わると、直ぐに仲良しのＡカップの瑞希（ミズキ
ミズキン ズキン）と一緒に、家路についた。

今日は、毎月発行される”ザ・月刊マツチヨ”の発売日である。

マチは、はやる気持ちを抑えるので一杯で、ズキンの話も上の空
である。

目蓋の裏には、上腕二頭筋や大腿筋が中を舞っている。
爽快である……。

マチは、そこそこにズキンの相手をして、電車の中で別れた。
マチの家は、ズキンの家より一つ手前の駅が最寄の駅である。

電車を降りたマチは、競歩選手のように左右にお尻を振りながら、いつもの本屋さんに急いだ。

1か月で一番駅前が輝いて見える日だ。

本屋さんに行く途中、”ザ・月刊マッチョ”を購入している自分の姿を空想していたマチは、空想の中のシュミレーションで、財布の中身が少々不足していることに気が付いてしまった。

（今月、ちょっと使い過ぎちゃったなあ。お金下さないと・・・）
まちは、ちよつと青い顔になりながら、仕方なく先に銀行に向かうことにした。

何と、そこで事件が発生してしまったのである！！

今月の使いすぎに、今更ながら気付いたマッチンは、神経的なダメージが透かさず腸にやって来た。

マチの喜怒哀楽は表情よりも先に腸に来る。

お金を下す前にお腹が下った。

マチは、銀行に入るや否や、まず先にトイレに向かった。

今度は、競歩選手のように左右にお尻を振るわけにはいかない。

極力刺激を与えないように、行き交う人をスルリとトイレに滑り込んだ。

ザ・月刊マッチョを購入する興奮と、下半身からの出力物が出ようとする解放感からの興奮が、否応なしに、まちの気持ちを高ぶらせる。

震えがくる。

しかも、トイレの中には、誰もいなかった。貸切だ。音を出し放

題だ。

乱雑な音を散発しながら、快感の坂道を昇っていたところ、こちらの音より騒がしい音がトイレの外から聞こえて来るのだ。

普通の音ではない。

「バン、バン」と言う車がぶつかる様な大きな音と共に、女性の悲鳴が聞こえて来た。

（えっ？何？）

マチは、トイレの入り口に耳を当てた。

この姿勢は、2年半自分の部屋でやり慣れている。

壁伝いに聞こえてくる音を聞き分けたら、誰にも負けない。

右に出るものは左に出ない。マチは、最右翼である。

（も、も・し・か・し・て、ぎ、ぎ・ん・こ・う・ご・う・と・う??）

ソロリとドアを3cm少々開け、外の様子を伺う。

銀行強盗一味の一人が、乱暴に行員に指示をし、入り口のシャッターを閉めさせている。

先の長い鉄砲（猟銃）も持っている。間違いない。銀行強盗だ。

マチは、ゆっくりとトイレの入り口のドアを閉めると、音を立てないように大騒ぎで狭い空間を暴れだす。

「わーわーわー。どーどーどー。どうしよ、どうしよ、どうしよう
うろつろ。」

一騒ぎが終わると。

(どうしよう。このまま隠れて・・・)

一旦、個室に戻った。

まだ、ほんのりと自分の残り香を嗅ぎ締めながら便座に座る。
ちよつと落ち着きを取り戻してきた。
すると、何かが疼く。

こう、何と言ったら良いか、湧き上がる気持ちにマチの心を押し上げてくる。

頭を中心に、冷え性などは無縁とばかりに血行が良くなる。
自然に、右手が拳を握っている。

マチは、個室を出ると入口に近づき、再び得意の”耳を当て”ポーズをとる。

聞こえてくる。

犯人が威嚇する音。

誰かが殴られている音。

悲鳴

子供の無く声。

マチの中の熱い正義と言う点火物が、憤りと言う可燃物に火を付けた。

心の中で、高らかに燃え上がる。

身体が震え、目が血走る。

”噛めんライダー”が、”ウルト鰻”が、”見て黄門”が、全てのヒーロー共がマチの背中をプッシュする。

「あ、あゝ、あ、頭にきたゝ！！！」

まちは吠えた。外に声が漏れない程度に。
以外と冷静である。

「体が、熱い！熱い！熱いゝ！」

マツチンは、思わず鞆の中の“彩色兼備茶”300mlのペット
ボトルを取り出し、“スカッ”とキャップを廻すと。

一口ゴクリ。

二口、三口。

なぜ、鞆の中にお茶が・・・？

うん？

「あゝあゝあゝ。マツチヨンだあゝ！」

やっぱり、小さな声で叫んだ。
引き続き冷静である。

「そうだ、そうだ、マツチヨンだ。でも、でも、でもゝゝ」

忘れていた。

長い平穩の日々に、すっかり馴染んでいた。

しかしだ。

疑問がある。

マツチヨンになれたとして、本当に強いのだろうか。
全然弱かったりしてゝ。

内心は本当にこんな事件にぶつかると思っていなかったので、心構えが出来ていない。

でも、あの時感じた、あの感覚。絶対に強いはずである。しかし、犯人一味は”先の長い銃”を持っているようである。

どうしよう、どうしよう、どーうしよう〜。

そこに、銃声と共に叫び声が。

熱くなる。本当に熱くなった。ポパイの様に・・・。

7年前、マチがまだ小学性だった時に、先生に自分が割ってもいないガラスを割った犯人されたとき以来の怒り。

マチは、その時の恨みも思い出した。

執念深いマチの怒りは、今、倍増に！

そして、”噛めんライダー”が、”ウルト鰻”が、”見て黄門”が、全てのヒーロー共がマチのお尻もプッシュする。

マチは、怒りのまま、真っ赤な財布から”プロテインX”を1袋取り出し、封を切る。

真一文字に切れた切れ目は、見事に美しい。

マチは、それを、満足げに眺めると頷いた。

「縁起がいい」

そして、“彩色兼備茶” 300mLのペットボトルに内容物を入れる。

怒りのシャッフルだ。
泡立つ。

マチには、もう迷いはない。

よく混ざった、プロテインXと彩色兼備茶のブレンドを一気に飲み干した。

途端！

心の熱き正義感が血流に溶け込み、猛スピードで全身を駆け巡る。

ぐぐ、ぐぐぐ。

ここで、気付いた。

「ま、まずい！制服が、制服がはち切れる」

慌てて、一気に服を脱ぎ出す。

制服は結構高いぞ。急げ！。

マチは猛スピードで、乙女の皮を剥き始めたが、最後の一つ、いや二つ。二枚重ねのブラが間に合わなかった。

グwwオーン

両肩、腕、胸が、そして、お尻とお腹に太腿が・・・。

全身が心地よく締め付けられ、そして、ずしりとした重量感を感じる。

パチーン。ブラのホックが気持ち良くすっ飛んだ。そして、肩紐が切れる。ブチン。

ちょっとシヨックだが、体は心地よく軽い。

ざ、ざーん。

体中に漲るパワー。

少々熱苦しいが、”絶快感”

変身！

左手を斜め前45度に掲げ、指先までピント伸ばす。右手は肘から曲げ、左手と平行に。両足は軽く膝を曲げ、しっかり安定させたポーズを取る。

マツチヨン推参 Oh、Yey！

¥（・・）／『横書きのみ対応』

マチは、無残なブラを手に後悔が過ぎったが、そんなことでめげてはいられない。

これから、一世一代のデビュー戦が待っているのだ。

トイレの鏡で背中を確認する。（までもないが）

”マツチヨン”と言う文字がくつきり浮き出ている。

「よし。大丈夫だ。マツチヨンだ」

マチは、颯爽とトイレから飛び出ようとしたが、何か後ろから引っ張られるような気がする。

（このまま、飛び出ているのか？大丈夫か？）と、何かが。

マチは、後ろを振り向いた。

脱いだ服が、乱雑にトイレのドアに掛けられている。鞆も便座の上だ。

気になる？

気になる。

そうだ。変身が解けた後、この服をどのタイミングでここに取りに来て、着替えるかである。

このトイレで、元に戻ったら絶対にばれてしまう。

と言うことは、持ち物は持参しなければならない。
かと言って、鞆も剥きだしで持つて出る訳にもいかない。

どうしよう。

辺りを見回す。

何も無い。

洗面台。個室が3箇所。その横に掃除用具室。

（そうだ！）

中にはあるはずである。

あった。青いポリバケツ。

ちよつと、衛生的に気になるが、この際そんなことは言ってもらえない。

マチは、バケツの中の掃除用具や雑巾を全て取り出し、軽くトイレットペーパーを敷くと、鞆と制服を中に押し込んだ。

マチは、再び左手に青いポリバケツを持ち、颯爽とトイレから飛び出そうとした。

飛び出そうとしたが、何か恥ずかしい。

これは、直ぐに気がついた。

パチンパチンの、女性用パンティー1丁である。

このまま飛び出すのは、幾ら変身しているからと言っても乙女のプライドが許さない。

（どうしよう?）

考える。

自分の脱いだ服を見る。

摘んでみる。

制服は、正体がバレてしまう可能性がある。或いは、変質者と思われるわれてしまう。

多分、後者だ。

（そうだ!）

マチは、毛糸の白い長めのマフラーを青いポリバケツの中から取り出した。

「これを・・・」

胸に巻くか、下に巻くか?

幸か不幸か、マチの胸はAカップに満たないAカップダッシュ。さらに乳首も小さい。

悲しいことに大胸筋に吸収されてしまっている。

物理上、押さえるものは必要ない。
十分男としても通用する。

と言うことは、隠す物はない。

・・・のかもしれない。

ないはずだ。悲しいけど。

ないと言うことにする。

マチは、ふんどの様に股間に巻いた。

パチンパチンのパンティーの上に、ソフラン仕上げの柔らかいマ
フラーを巻いた。

コソバイが、ちょっと気持ちいい。

内股になる。

(よしと！)

マチは、考えた。これで大丈夫か？

- 3 秒位 -

「やっぱいい、顔がばれる」

多少ほっぺに筋肉がついた位で、ほとんど顔はそのままである。

(顔を、顔を、顔を隠さなきゃ。どうしよう、どうしよう)
うつうつする。

「・・・そつだ！」

鞆の中に、スーパーで買い物をした時のポリエチレンの袋があることを思い出した。

マチは、何でも捨てないで取っておくタイプである。

買い物をした時に、必要のない袋を几帳面に小さくたたみ、一回結んでカバンの中に仕舞って置いているのだ。

マチは、鞆の中の3つある袋から、一番大きい袋を取り出した。

ちょっと小さいが、それを頭から被り、乱雑に指で目鼻口に穴を空けた。

（これで、よし！）

マチは、再び考えた。これで大丈夫か？

- 凡そ30秒 -

頷く「大丈夫」

再び、気合のポーズを取り、颯爽と飛び出すようにトイレのドアの前に行くと、ゆっくりと静かにドアを開け、外の様子を伺った。

<つづく>

4袋 正義の不審者（具体的に憂いあり）（前書き）

銀行強盗 対 マッチョン その結末は？

4袋 正義の不審者（具体的に憂いあり）

銀行強盗一味は、表口のシャッターを全て締め、周りが異変に気付く前に素早くお金を盗み通用口から逃げる予定でいた。

通用口には、逃走用の車を待機させている。

シャッターが閉まり始めるのを合図として10分以内に、現金を盗み逃走する計画であった。

10分以内であれば、警報さえ押されなければ、警察は間に合わないかと踏んでいたからである。

全ての警報を押されないような手筈を整えていた。

一味が、行動を開始し、シャッターを閉めたのは、15時50分の閉店10分前である。

閉店が10分早かったことで、不思議がる人はいても、警察に通報はしないと踏んでいたのである。

ところが、内部の音を聞かれないようにと、犯人一味の一人がATM側の入口も閉めてしまった。

そこに、偶々私服警官がお金をおろしに来たのである。

21時まで営業しているはずのATMが閉まっていることに腹を立て、いや、不審に思い通用口に回ったところで、中の異様さに気がついたのである。

そして今、犯人一味は、銀行の中に立て籠もり状態である。

マチ（マッチョン）は、静かにゆっくりとトイレの入り口のドアを開け、外の様子を伺った。

廊下には、誰もいない。

しかし、犯人一味の荒々しい声がマチの耳にも響いてくる。

外も騒がしくなってきた。

白黒のツートンの車が何台も止まり、拡声器で、なにやら叫んでいる。

マッチョンでいられるのは、最大15分である。

悠長に考えている暇はない、まずは、ホール入口まで行こうと、マチはトイレを出た。

白い毛糸のマフラーを腰から靡かせ、左手には青いポリバケツをぶら下げた状態で、廊下を駆けた。

駆け抜けてしまった。

銀行の窓口が並ぶホールまでの廊下は短かった。ほんの数メートルである。

マチは、その距離をマッチョンのパワーで駆けたものだから、気がついた時にはホールの中央付近まで飛び出していた。

「行き過ぎた」

と、叫びたいところを必至に言葉を飲み込んだ。

マチは、左右をキョロキョロと見回す。

ホールの片隅に20数人のお客さんと行員が、手首を縛られ押しやられている。

その前には、先の長い鉄砲（ライフル銃）を持った男1と、ナイフを持った女の二人が見張っている。

その前には、恐らくお金がびっしりと詰められているだろう、パンパンの大きな黒い鞆が二つある。

さらに、窓際には、人質を縦に外の様子を伺う男が二人。一人は、やはりライフル銃を持っている。

風の様にホールに飛び出した半裸のマツチヨ男（本当は女性だが）を見て、犯人一味は驚きで犯人同士で互いの顔を見合せている。直ぐに言葉も出ない。

捕らえられている行員や、お客さん達も啞然として口をポカッと開けて固まっている。

（まずい、これ、どうしよう）
と思った時には、既に遅い。

マチに2丁のライフル銃が向けられている。

しかし、幾ら犯人でもそんな簡単に人を撃つことは出来ない。ライフル銃を持った犯人二人が、互いに牽制しあっている。

そこに、危険と感じたマチは、顔だけを手に持つ青いポリバケツに隠し、横からそつと覗く。

その、奇妙な様子に犯人一味も啞然とし時間が止まる。

- 数秒の沈黙 -

「誰だ、お前は！」

我に帰った犯人一味の一人が、声を発した。

誰だと言われたマチは、反射的にテレビのヒーロー番組で、颯爽と登場するヒーローのシーンが頭を過った。

ここから先は、ヒーローお宅としての本領を発揮する。

毎日の様に自分の部屋で一人芝居をしている。その成果を披露する時なのだ。

マチのヒーローデビュー公演が始まった。

極力男らしい太い声で御託を並べる。

「一つ、ひとより力持ち。二つ、不束者でござい^{ふつつかもの}ます。三つ、身から出た錆びだよね。」

マチは、歌舞伎役者の様にポーズを取り、さらに続ける。

「他人の金で裕福な生活をしようなんて、何て了見だ！真面目に働け、この悪党共め！、悪を戒め、弱気を助けるご存じマツチョン推参」

マチは、左手に青いポリバケツを持ったまま斜め前45度に掲げ、指先までピント伸ばす。右手は肘から曲げ、左手と平行に。両足は軽く膝を曲げ、しっかり安定させたポーズを決めた。

（決まった！）そして、

「トオー」

跳んだ。

マチが、人質を見張っている男女の前に向って飛ぶと、マチも驚く見事な跳躍力で、一つ跳びで図った様に犯人の真前へ。

犯人も驚いたが、マチが一番驚いた。

「キャッ」と黄色い声を思わず上げてしまった。

（やつばゝ、聞かれてしまったかナ？聞かれていない訳がないよねゝ）とそろっと、周りを見回すと、とにかくみんな固まったままである。

マチは、その瞬間咄嗟に猿の真似をして、誤魔化していた。
「キャッツキャ、キャッツキャ」

と暴れ出す。

そして、呆気にとられている男のライフル銃の先を掴むと、意外と柔らかそうである。

ちよつと捻ってみた。

すると、いとも簡単にUの字に曲がる。

感触が気持ち良い。

それで、マチは一気に気分が良くなり、「ヒーロー」マツチョン”になり切る。

Uの字に曲がったライフル銃を床に投げ捨て、男の両腕を掴み、もう一人の女の方に放り投げた。

女は、ナイフを落とし、二人は抱き合うように床に転げる。

マチは、それを見てちよつと感じたが、左右に首を振り直ぐに思い直す。

すかさず、マチは、数人の縛られている手首の紐を、親指と人差し指の2本指で摘まむと、紐はいとも簡単に擦り切れる。

マチは、男女二人の首根っこをネコのように摘み上げ、後は両手の自由になった人質達に任せる。

残りは、窓際にいる二人だ。人質一人にライフル銃を向けて、マチの方を伺う。

それでも、マチが二人の男に一步一步近付くと、今度は、マチに猟銃を向けて来た。

が、気分の高揚しているマチは、「ヒーロー」になり切っている。

それに、付きつけられている猟銃に対し、今一現実感が無かった。

迂闊であつた。

安易であつた。

「バン」「バン」

調子に乗つたマチに対し向けられた銃口は、大きな音を立てて火を噴いた。

銃弾は、マチの胸に向つて飛んで来た。

危ない！

しかし、マツチヨンに変身したマチには、銃弾が蝶々が羽を広げ、ひらりと飛んでくる様に優雅に見える。

マチは、銃弾を右手の親指と人差し指の2本の指で挟み取つた。

その摘み取つた銃弾をマチが眺めていると、もう一つ放たれた銃弾がマチの左乳首のやや下を襲つてきた。

危し、マツチヨン！

声を出す暇も無かつた。

銃弾は確実に胸を捕らえた。

確かに捕らえたのだ。

捕らえたのだが、その銃弾は、マチの胸に少し食い込んだが、大胸筋に弾き返され、ぽとりと床に落ちた。

マチは床に落ちた銃弾を眺める。

犯人も眺める。

そして、そこにいる全て人が眺める。

マチは、銃弾の当たった左胸を恐る恐る見てみた。

左乳首の3cm程下が、ちよつと赤くはなっているだけである。

しかし、それを見たマチは、怒りに震えた。

マチは、胸には自信がない。そう、微かに膨らんでいるだけだからである。だが、乳首には自信を持っている。

小さく、綺麗な球状。それでいて滑らかで、薄いピンク色である。

当然、乳首は筋肉では無い。

当たれば、木端微塵にあんるはずである。

そう思うと、マチの怒りは頂点に達した。

後は、あつと言うまの出来事だった。

解放された人質の活躍もあつて、あつと言う間に犯人達は、お縄になってしまった。

ホール内は、歓喜の渦に包まれた。

マッチョンコールの嵐の中、マチはカウンターに飛び乗り様々なポーズを取る。

上腕二頭筋を強調する”ダブルバイセップスフロント”。魅力ある逆三角形のシルエット。

身体の厚みを強調する”サイドチェスト”

背中筋肉と、”マッチョン”と浮き出た文字を強調する”ダブルバイセップス・バック” 背中筋肉の凸凹が小腸の様にうねって見える。

マツチヨンの文字も読みづらい。

e t c .

祭りの様な騒ぎの中、中の様子を勘違いした、警察が正面のシャッターを壊し、窓ガラスを割り、遅ればせながら突入して来た。そして、どう見ても歓喜の輪の中心でヒーローとして扱われているマチを、外見から不審人物と思い、数人の警察が襲いかかろうとする。

中の様子から、犯人と間違えた訳ではない。
不審者としての判断である。

「マツチヨン逃げて」

異様な雰囲気を感じ取った女性行員が、叫んだ。

マツチヨンを後ろに背負って守ろうとする行員とお客さん達。
それを突き破ろうと進む警察。

既に縄で縛られている犯人を全く無視をした変な構図が出来上がった。

そのもみ合いの中、マチは警察の頭を跳び越え、外に脱出した。
マツチヨンの残り時間は、もうそんなに無いのである。

警察は踵を返して追いかけてくる。

マチは、逃げる。青いポリバケツを左手に持ったまま、

「なんで」

マツチヨンが真剣に走ると、自動車並に速い。
三段跳びの様な歩幅で、車道を走る。

マチの行く先に見慣れたグレーの地味な軽自動車が止まっている。
(ラッキー、なっちんの車だ！)

バックミラー越しにマッチョンが走って来るのを見つけたなっちは、

急発進で、飛び出した。

「何で、何で、行っちゃうの？」

マチの希望を根絶するかのような、なっちんの行動。

そんなことはないのだ。なっちは考えていた。

ここで、マッチョンを乗せると後が厄介である。

なっちは、窓から大声で叫ぶ。

「マッチン、次の道を右に曲がって裏通りを左に曲がって」

急発信したグレーの軽自動車は、黄色信号を突き破り、一方通行を逆行をし、目的地へ急ぐ。

マチも軽やかな脚で警察から逃げる。

そして、マチが左折した先にグレーの軽自動車の後部ドアが口を開けて待っている。

マチは、そこに飛び込んだ！

なっちは、血走った目で急発進する。

一方通行で、足踏みをするパトカーを残し、グレーの軽自動車は夕暮れの街を駆け抜けて行った。

夕方のワイドショーの実況リポートが、偶々銀行の近くに来ていた。

リポーターが、銀行強盗に気付いたおかげで、この一部始終を銀行の窓越しに生中継していたのである。

なっちゃんは、それを見ていたのだ。

テレビの画面からマツチヨンの様な影を一瞬捉えたなっちゃんは、居ても立ってもいられず、車を飛ばして待機していたのである。

<つづく>

4袋 正義の不害者（戦い終えて悲ぴいヒーロー）（前書き）

マチの気持ちとは裏腹にマッチョンの噂は、全国に広がって行くのだった。

4袋 正義の不審者（戦い終えて悲しいヒーロー）

あれから、世間は大騒ぎである。

何せ、フィクションでしか見たことのないヒーロー？が、何処からともなく突然現れたのである。

彼はフィクションに登場するヒーローとは全く似つかない、ポリバケツをぶら下げ、白い毛糸のふんどしを締めたちよつと変質者っぽい、マッチョ”男？”ではあった。

しかしそれが、驚くべきことに、彼は誰一人の負傷者を出さずに、10分少々で銀行強盗事件を解決してしまったのである。

この紛れもない事実には、全幅の称賛を向けて然るべしである。少なくとも、人質になった行員やお客さん達は、熱い賞賛を送っていた。

しかし、新聞や、テレビニュース、報道番組での取り扱いは、冷やかだった。

警察が、マッチョンと事件の関連性を追求する為に行方を探していることを伝えるのみで、事件を解決したのは、無意味に高価な銀行の窓ガラスを割った警察と言うことになってしまっている。

当然と言えば、当然である。特定人物の活躍が報道されなければ、必然的にそう言うことになってしまう。

だが、その報道に対して覆いかぶさる様に、少し遅れて”マッチョンの活躍と言う真実”が口コミや、メール、ネットを通じて、次第に世間に広まっていった。

その結果、巷では保守的な人達によるマッチョン不審者説と、新

しもの好きの人達によるヒーロー説の論争が繰り広げられるようになっていった。

そんな中、メディアの中でもヒーロー説の後押しをするものが現れてきた。

それは、話題性が主役のワイドショーである。

当日、取材で事件に出くわしたローカルのワイドショーを初め、視聴率の元になるとばかりに、ヒーローとして盛り立てる。

最近、芸能界にゴシップネタが無かったので尚更拍車が掛かっていった。

勿論、結果的に立派なヒーローとしての活躍をしたのである。

当事者達に、どんな取材を行っても手放しでの称賛こそあれ、否定的な回答は皆無なのだ。

どのワイドショーでもマッチョンの背中に浮き上がる文字を取り上げ、「正義の超人マッチョン」と言う呼び名で全国に名声は広まっていた。

次第にマッチョンは、ヒーローとしての地位を確立していくのであった。

- 時間は遡り、銀行強盗事件のあった翌日 -

事件のあった銀行界隈では、被害者達からの正確な情報により、翌日にはヒーロー出現として、大きな盛り上がりを見せていた。

勿論、隣町の女子高もご多分に洩れることは無かった・・・。

「ね、ね、ねえ。見た見た！昨日のニュース」

「うん。もち。知ってる。マッチョ男でしょ」

「マッチョンって言うてよ」。マッチョン。ハハ」

「やだゝもう、半裸でさゝ」

「でも、一人で、銀行強盗10人もやっつけたんだって」

「まじ、それ。凄げくない？」

「・・・・・・」

こんな、少し尾ひれが付いた会話が、あちこちで飛び交い大盛り上がりを見せている。

だが、この渦に敢えて溶け込まない少女がいた。彼女からはいつもの有り余った元氣は鳴りを潜め、噂話には耳を塞ぎ、ひっそりと誰とも接しないようにしている。

伊藤真知 いと まち 16歳。高校1年生。通称マッチン。

しかし、マッチンの元にも”渦”が音を立てて急接近して来てしまった。

「マッチン、ねえ、見た、みた？」

マチの友達のズキン（友達の瑞希）が、マチが教室に入ってきて来るや否や飛ぶようにやって来た。

マッチンは”来たゝ”と思った瞬間、目をそらしていた。

「え、え、な、何のこと？」

マチには、ズキンが何の話をしようとして来たかぐらいは百も承知である。

勿論、昨日の銀行強盗の事件のマッチョンの活躍に決まっている。

しかし、マチは当然の如く、極力昨日の事には触れられたくはないのである。

あの恥ずかしい姿を思い出すだけで、月に叫びそうになってしまふ。

触れられたくないマチは、咄嗟に惚けて見せたのである。

正直なところ、マチは惚けて見せるより、その話題から逃れる方法が見つからなかった。

「何って、昨日の銀行強盗事件に決まってじゃん。マッチン、丁度その時間頃近くにいたんじゃないかと思ってさ。マッチンは見なかったの？」

「な、何を？」

「何をつて、決まってるじゃん。我らのヒーロー、マッチョ男の”マッチョン”だよ、もー」

「あつ、そ、それね。その事件ね。あゝ、見た見た、ニュースで見たよ」

おどおどする上に乗りが悪い。明らかにいつものマチではない。いつものマチであれば、自分から食いついてくるはずである。

「どうしたの、マッチン。マッチンの大好きなヒーローの話じゃない。」

ズキンは、乗りの悪いマチにがっかりしてしまう。

「そ、そんな、そんなことないよ。興奮しているよ。ホント」

マチは、両手を振って否定するが、表情が慌てているように見え

る。

「な〜んか怪しいな〜。何か隠してるでしょう」

マチの顔を覗き込む。

「あつ、分った」

マチは、ドキリとそて、背筋が伸びる。

（絶対に分る訳がない。顔だって、鞆だって隠している。自慢の百万ドルの乳首以外は・・・）

「あ〜そっかー、マッチンは、自分がヒーローじゃないから嫉妬してるんだー」

「そ、そう。その通り」

そこで、ベルが鳴りズキンは自分の席に戻っていったので、話が途切れた。

マチは、作り笑顔を静かに元に戻し、持ち上げたままだった肩を降ろした。

「あほ、ズキンめ、私がマッチョンじゃ……。恥ずかしくて、絶対に言えないけど・・・」

マチは、正体を言えないヒーローの辛さが少し分った気がした。理由は全く違っただが・・・。

こんな、会話があちこちで飛び交い、否が応にも巻き込まれてしまっ。

この日の学校は、マチに取って一番辛く長い一日となった。

家に帰ったら帰ったで、ミ〜ハーな母親の付き合いに頭が痛くなる。

マチは家に帰ると、いつもの様にキッチンに行き、用もなく冷蔵庫を開ける。

日課だ。

暇な時は、ついつい冷蔵庫を開けてしまう。

タバコを吸ったり、飴玉を舐めたりするのと同じ感覚である。

冷蔵庫を覗きこんでいるマチに専業主婦の母がノリノリで話かけて来た。

「マチ、見て見て。これ、マッチョ男」

マチの母は、いち早くマッチョンの写真をキッチンの正面に貼っている。

マチは、

「うわっ」

と言いかけた声を必至で飲み込もうとしたが、抑えきれず少し仰け反りながら漏らしてしまった。が、”何で！”と叫びそうになった言葉は抑えることが出来た。

マチは、平静を装って応える。

「そのボケた写真どうしたの？」

「買っちゃった。ハハ！」

何と、母はマッチョンの写真を欲しいが為に、朝一で、テレビの画像を印刷する装置を買う為に大型電気店に行ったのであった。

マチは、母の浮かれた口調にイラッとしたが、これまた必死に我慢する。

「見て、この大胸筋。そして、この乳輪から、乳頭にかけての美しさ。マチよりずっと綺麗だわねー」 何て言ってマッチョンに見えながら洗い物をしている。

（何が、” マチのより綺麗だ ” だ！同じじゃ。タコ。同じ人物だよ。あんたの娘じゃ。だいたい、乳首を比べるなら自分の茶色いのと比べれて言うんだ！それに、マッチョ男でなくマッチョンって読べよー！ 天然！）

と、言いたかったが、ヒーローは身分をばらせない。
正確には、ばらしたくない。

マチは、母の後ろに回って ” あかんべ ” をしてやり、ハイハイ聞いておいた。

マチは、ふと次の治験は、母親で試そうかと思うのであった。

それでも、一つだけ分った。

（そっか、私のヒーロー好きとマッチョ好きは純粹に遺伝だったんだ）

何故かちょっと安心した。

学校へ行っても、家に帰っても、街中でも、そして電車でもマッチョンマッチョンだ。

これが、美少女ヒーローであれば、マチも優越感に浸り、秘密を楽しむことも出来るのだが、乳首丸出しのふんどし英雄では、恥ずかしくて堪らない。

しかし、ここは時が解決してくれるのを待つしか手はないのである。

正体がばれなければ、自然消滅しマチに被害はないのだ。

「我慢だ！そう我慢」

マチは、そう呟き居間に戻ると曜日を錯覚させる、いつもは内気な人物が、今日は派手なポーズでマチを出迎えてくれた。

今日、一番頭が痛くなった。

（なっちゃんが来てる。日曜じゃないのに。なんで）

キッチンから、居間の間の移動では派手な出迎えは必要ないのだが、今日の菜茅（兄の彼女で、通称なっちゃん）は、昨日の興奮が覚めやらない。

左手に青いポリバケツ代わりに、今食べていた裂きイカを持ったまま斜め前45度に掲げる。

親指とひとさし指以外は、指先までピント伸ばし、右手は肘から曲げ左手と平行に。

菜茅は、脚を大きく広げて踏ん張り、マツチョンポーズで出迎えてくれる。

望んでもいないのに。

「マツチン、昨日はお疲れ様です」

マチは、背の低い菜茅を簡単に押さえつけ、慌てて右手でナツチンの口を抑える。

空いた左手で、口元に人差し指をたてた。

菜茅は、もごも言いながら頷いているので、手を離してやる。

「なっちゃん。もう、疲れるから止めて!!」

「マツチン大丈夫です。安心して下さい。絶対誰にも言いませんか

ら」

菜茅は、ウインクをして見せる。

マチは、辛うじて片目が少しだけ空いているで、ウインクと分かった。

そこに、兄貴が、二階の自分の部屋から降りてきた。
「何を言わないって？」

菜茅が、嬉しそうにすかさず応える。

「マツチヨンが、マツチン・・・（もごもご）」

マチは、慌てて菜茅の口を再び抑える。

「いいじゃないか、マツチヨンとマツチンの名前が似ている位で怒らなかつて」

兄は、菜茅が名前が似ていると言うのだと思っていたようだ。

（そう言えば、似てる）

マチも納得してしまうのだが、それにしても、菜茅がこんなに口が軽いとは思いもなかった。

マチは、今更ながら、菜茅に喋ったことを後悔するのである。

が・・・その時である。

ドスンと言う大きな音と揺れが、築10年の建坪20坪、延床面積40坪、総2階建てで、ローンの残りが後15年の小さな豪邸は激しい揺れを見舞った。

我が家を愛する母のうるたえを放っておいて、マチ、菜茅、兄の3人は外に飛び出して驚いた。

<つづく>

4袋 正義の不害者（戦い終えて悲ぴいヒーロー）（後書き）

安易に初めてネタに詰まるのであった。

5袋 君のパワーは10万Nヘニュートン《 運はウンの近くから》

（前書き

ドスンと言う大きな音と揺れが起こり、家の外に出たマチ達3人は驚いた。

マンション工事現場のクレーンが横倒しになっているのである。

5袋 君のパワーは10万ヘンリトン（運はウンの近くから）

マチは外に出て驚いた。

話では聞いたことがあるが、もちろん初めて見る光景である。

マンション工事現場で使用していた大型クレーンが、横倒しになっているのである。

家の前の通りは、数件先が突き当たりになっている。そこに建築中のマンションのクレーンである。

まるで恐竜か、はたまた大きな鋼鉄のキリンロボットが横になっているかのような、壮大な光景である。

それを見るなり、菜茅は何をどうイメージしたのか、

「キリンって横になって寝るんですね」

菜茅が小首を傾げて納得している。

なっちゃんは何処に向かうつもりなのだろう？

マチは菜茅の行く末が心配であったが、相手をするのが面倒なので放って置くことにした。

キリンの頭、いや、クレーンの先端は、道路を横切り反対側のプレハブの物置を無残にも押し潰している。

幸いにも物置小屋は、無人であった。クレーンを操作していた人も無事である。

そこまでは良かったのである。

しかし、不運にもそのプレハブの物置小屋の直ぐ横に路上駐車をしていた車があった。

この車の後ろ半分がクレーンの首に無残にも押し潰され、半分位の高さにまで圧縮されてしまっているのである。

その影響で前席部分もかなり押し潰されてしまっている。

マチ達はその光景を目にした時には、既に工事現場の人や、近所の人数人が車の近くに駆け寄って騒ぎになっていた。

車の前席からは、女性の悲鳴と男性の助けを求める声が入り混じって耳に飛び込んでくる。

「アゝ、アゝ、痛い」

「苦しい、助けてくれゝ、ウゝ」

男女の声が漏れてくる。

周りからは、

「警察に電話はしたのか？」

「消防署は？」

「クレーン車を退かせられないのか」

の声が、聞こえており緊迫した様子が伺える。

マチ達3人も、菜茅を先頭に潰された車に駆け寄った。近くに行くほどに、苦しそうな荒い息遣いが耳に入り、マチの心にダメージを与えてきた。

膝の関節が緩みそうである。

マチは、顔を両手で覆いながら、恐る恐る広々開けた中指と薬指の隙間から、車の中を除こうとすると、既に菜茅は、潰れた窓の隙間に顔をピタツとくっ付けて中を覗き込んでいた。

マチの右手の中指と人差し指の間は、常人よりも大きく開くのだから、効き目が右目であるからである。

マチは菜茅の肩越しから車の中を覗いて見た。

幸いにも、潰れた後部座席に人はいない様である。
マチはひと安心した。

しかし、前席の二人は、互いに中央を向き重り合った状態になっている。
下側になっている女性はかなり苦しそうな息遣いになっている。

運転席側から車の中を凝視していた菜茅が、除くのを止めマチに耳打ちをして来た。

「出てます」

「えっ？」

「ぽろーんと。出ていますヨ」

マチには、菜茅の言っている意味が全く分らない。

マチは、菜茅に手を引かれ運転席側の窓から中を除いて見た。

潰れた車内には、苦しがつている二人とは裏腹に、わりと自由な空間を維持している男のお子さんがいらっしやるのである。

二人は全く身動きが出来ないので、お子さんを元の鞘に納めるこ

とが出来ず、自由なまま放置されているのである。

偶然、いや最初からその行為を勤しむ為に、そこに駐車していた二人は、競う様に相手のシートの少しだけ上を目掛けて、身を乗り出していたのだろう。

マチの見た目には、恐らく目的の行為の為に身を低くしていたことが幸いして、助かった様に見えた。

もし、リクライニングを使って背もたれを後ろに倒して営んでいたらと思うと、マチは色んなことを想像してぞっとした。

「人間何が幸いするか分かりですね」

菜茅はそう言ってお茶目な笑顔を見せるが、マチには菜茅の図太い神経の方が良く分らなかった。が、少なくとも、中の二人が助かっている解釈は、菜茅と同じであることだけは分った。

車の周囲には、次第に人が集まって来る。

工事をしていた人達数人に兄が加わり、車を押し出そうとするが、全く動く気配がない。

変形したドアは幾ら開けようとしてもビクともしない。

窓も潰れていて、そこから救出することも出来ない。

誰もどうすることも出来ない。

「なんとか出来ないのか、扉を外せないか」

二人の顔は見えないが、車の中からの声は、次第に弱々しくなっていく。

顔は見えないが、苦しそうな息遣いだけが荒くなっていく。

顔は見えないが・・・。

顔は見えないのだが、マチは女性か誰であるのかが分ってしまった。

助手席側から見える女性のスカートが、マチの女子高の制服なのである。

しかも、悲鳴に聞き覚えがある。

少し見える、髪も茶髪である。髪留めにも記憶がある。

マチは思った。

まず、間違いない。

同じクラスの麻美鏡子あさみきょうこである。と。

そう、今日学校をサボっていた、唯一のマチの天敵。

マチと彼女は犬猿の仲である。いや、バーチャルとリアルの仲である。

本来二人は、交わることがない別世界の者同士である。

マチはそう思っている。

そう思いだしたのは、高校に入学して一か月が経過したところからである。

<つづく>

5袋 君のパワーは10万N≪ニュートン≫（鏡子の悲しい過去）（前書き）

クレーン車の下敷きになって、助けを求めている鏡子には、悲しい過去があった。

5袋 君のパワーは10万Nヘニュートン《鏡子の悲しい過去》

中学時代の麻美鏡子はヤンキーだった。

それは、周りの子達よりも、いち早くバイクに乗る男性に憧れを持った結果が、偶然にも、そちらに向かってしまっただけの結果であつた。

よつて、外見と中身は違つていた。

内に秘めるものは何を隠そう、実はヒーローお宅なのであつただ。

彼女は、その中でもバイクに乗つて現れる「ご免ライダー」シリーズが大好きであつた。

もちろん、ヤンキー仲間とは、その話題を共有することは出来ない。

恥ずかしくて口に出せないだけではない、きっと、そんなことを口走つたらバカにされて仲間外れにされてしまう。

気の弱い彼女はそう思い、ひたすらヒーロー好きを隠していた。

彼女は、偶に家に遊びに来る友達の手前、自分の部屋にグッズを置くことさえも出来なかつたので、そのストレスは次第に貯まつていったのである。

ヤンキー仲間がトイレで煙を立てている中、彼女はトイレに隠れて変身ポーズを取るのが精一杯のレジスタンスであつた（矛先は不明であるが・・・）。

ところが、彼女が中学を卒業して、高校生になる時に父親の転勤で引越すことが決まったのだ。

彼女はここが人生の転機だと思った。

当然の様に別れは辛い、仲間とは熱い別れになった。

しかし、それを差し引いても余りある喜びが待っているのである。
”ヤンキーを捨てて、ヒーローお宅に専念できる”のだ。

彼女には、喜びを胸の中に押し込め、仲間との熱い別れの時を演じ？いや、別れを惜しみ終わると、解放の時が待っていた。

「今日から、ヒーローと共に人生を歩むんだ」

ヤンキーを捨てた彼女は、抑えきれない興奮を抱えて、援交親父達のヒロイン”花の女子高校生”に変身を遂げた。

「今度は、ヒーローお宅の友達を作るんだ」

そう思い、期待を膨らませ、入学式に挑んだその日である。

早速校門であからさまにヒーロー好きを披露している大胆な娘^こを発見した。

（いた〜！）

彼女は、コロンプスがアメリカ大陸を発見した時の気持ちが理解できた気がした。

彼女は、その娘の天真爛漫さと、純真無垢さ（後で大きな誤りだったことに気付く）の行動に惹かれ何とか近づこうと考えた。

すると、教室に入って驚いたことには、何と彼女は同じクラスであつた。

その娘は、周りの娘達が全く知らない人ばかりにも関わらず、入学早々”ヒーロー一人芝居”を演じては、良くも悪くも注目を浴びている。

カバンには、三つ葉葵の印籠を付け、消しゴムまでにもヒーローのキャラクターが描かれているのだ。

その娘は輝いていた。

少なくとも、彼女にはそう映った。

その娘は、自分の表現を知っていた。

少なくとも、彼女にはそう見えた。

日々、彼女を目で追う内に、次第にその子は彼女の憧れ（ヒーローお宅のカリスマ）になっていた。

その娘の名は伊藤^{マチ}真知と言った。

しかし、マチのオツピロゲな姿は、意志表現の下手な鏡子には雲の上の存在、とても敷居が高くて会話すら出来ないでいた。

ところが、1か月後、ついにチャンスは訪れた。

学校の購買で、偶然にも「最後の焼きそばパン」1個の争いをすることになったのだ。

偶然にも同じタイミングで購買に来てしまったのである。

焼きそばパンと言えば、鏡子のヤンキー仲間では特別な物であっ

た。

言わば、食物界のヒーローである。

鏡子には、マチの眼の色から、マチにとっても昼食界のヒーローであることが容易に理解できた。

それは、同じものを愛するもの同士であるから分り合えるものである。

と、少なくとも鏡子は信じていた。

鏡子はマチと同じヒーローを共有出来たことが嬉しかった。ちよつと近づけた気がして来た。

その時、鏡子は良い考えが脳裏を掠めた。

ここで、マチにこの最後の焼きそばパンを譲れば、きっとヒーロー仲間になれるのではないか。そう思った。

焼きそばパンは明日でも食べることが出来る。しかし、マチとの今日という日は、二度と廻っては来ない。そう考えたのである。

内向的な鏡子ではあるがフルパワーの勇気を振り絞った。

そして、「マチに焼きそばパンは、譲るよ」そう言おうと硬い口元が僅かに動き始めたところであった。

そこに思わぬ邪魔が入ってしまった。

「公平にジャンケンで決めよう。そうしよう。後腐れなしでさ」
購買のおばちゃんの余計な一言が、鏡子の描いた世界平和の構想を邪魔するのである。

「おばちゃん、それが一番公平だね。きっと」見て肛門様”もそう

言うと思うの」

それにマチも乗ってしまったのだ。
自己表現の下手な鏡子は自然とその流れに乗ってしまうより他なかった。

しかし、鏡子はそれでもジャンケンに勝ちさえすれば、焼きそばパンを譲ることが出来る。万が一負けたとしても、気持ち良く笑顔で譲れば、話すきっかけ位にはなる。
そう考えた。

さして問題では無い。と思った。

これが甘かった。

二人が、ジャンケンの構えを取る。

マチは、「最初は」と言う。

鏡子は、「ジャンケン」と言う。

始まり方が違ったのだ。

鏡子も、微かにハモらなかつたのには気付いたが、動き出した列車は止まらなかった。

マチは、「グー」と言い、当然拳を握る。

鏡子は、「ポン」と言い、手を開いた。

ここで、列車は急停止をした。

この勝負をどう捉えて良いか、審判の購買のおばちゃんにも分ら

ない。

”ぴゅー”と、購買に木枯らしが吹いた。ような気がした。

が、ここでマチが切り出した。

口調はヒーローになり切っている。

「たかがジャンケンとは言え、ルールを決めなかったのお互いの落ち度は五分と五部。その中で麻美さん、あなたが勝ったのだから、あなたの勝ち。私は、メロンパンで我慢するよ。それがさだめと言うもの」

過程は違うが、鏡子の思惑通りにことは運んだ。

ここで焼きそばパンをマチに譲れば良いのである。

「いいんだ。伊藤さんが食べてよ。私は・・・、私は焼きそばパンでなければならぬってことじゃないの」

鏡子は俯きながら、決まったと思った。

購買のおばちゃんも”美しい物を見た”と言う顔をしている。

鏡子は、一瞬痺れた。

しかし、マチに取っても、一度引き下がってから、しゃしゃり出て焼きそばパンを買うなんてことは、ヒーローとしての否、ヒロインとしてのプライドが許さない。

「これは、あなたのもの。私はメロンパンを食べる運命なの。メロンプリンセスもそう言っているわ」

愛おしそくに焼きそばパンを手に取り、鏡子に渡すのだった。

「いや、これはもう、あなたに譲ったものだから」
そう言って、マチに返す。

「うん、有難うでも、・・・」

「いやいや・・・」

「そんなことないわ・・・」

「・・・」

「・・・」

「いや、それは受け取れないの・・・」

きりが無かった。

余りにも終始ヒーローになり切った口調にイラッと来てしまった鏡子はいいにヤンキー口調で、

「あんだのだよ。とっとと、買って戻りな。・・・その、いちいちヒーロー口調なのがうざいんだよ」

と、言ってしまった。

ついには喧嘩になり、あげくの果てには、マチが渡した焼きそばパンを鏡子が受け取らなかった為に床に落としてしまった。

それを、後から購買に来た他の娘に踏まれてしまったのである。

結局、焼きそばパンの代金は二人で折半することになってしまった。

それからと言うものの、鏡子にとってマチは可愛さ余って憎さ百倍あからさまにヒーローお宅に成れるマチを、妬む様になって行ったのである。

マチにとっても、鏡子は頑固で偏屈なアンチヒーロー女になってしまった。

こうして、二人の仲は修復できないものになったのである。

結局またもや、鏡子は学校でヒーロー好きを名乗れなくなってしまった。

それでも、鏡子は一人、家ではれっきとしたヒーローお宅としてフィギュアや、ポスターを飾り、マグカップまでも「ご免ライダー」シリーズのキャラクター物を愛用するようになった。

特に今回の「Sorry」のグッズは大好きだ。

そんなことがあって、マチのヒーロー一人芝居は、時々鏡子の嘲笑の対象になるのである。

昨日も・・・

今回の「ご免ライダー」の「Sorry」^{ソーリー}の主演がかっこいいとか、変身ポーズが痺れるとかズキン（友達の瑞希）と話していた。

鏡子は何時ものように、「また、始まったよ、お子ちゃまのお遊びが・・・」と、マチが架空に憧れることを子供であると、否定してくるのである。

拳句には、「一生彼氏も出来ない」とか、「バージンのままお婆

ちゃんになる”とか、教室中に聞こえる声で言っでは、高笑いしてくるのである。

もう慣れっこになっているマチは、心で「この、やりマン女」と言っが、表向きはガン無視で、みんなに変身ポーズを披露していた。

マチは思っのである。

どうせ、相手は単品^{ひとり}である。仲間がいる訳ではない。

少なくとも学校では、私よりもよっぽど孤独である。

（世の中、数の多い方が勝つに決まっっている！）これはマチの座右の銘だ。

たえ喧嘩で負けても、マチの論理ではその後には部がある。

マチはそう睨んでいた。

マチには余裕があつた。

マチは、

「ご免ライダー・変身・トオー」

と高さ20cmばかりの教壇からジャンプをする。

それをズキンが盛り立てる。

「ソーリー、助けて」

そこから、始まる一人芝居に周りの娘達が、キャッキヤと喜んでいる。

それが面白くない鏡子は、一人芝居でマチが通り掛かつた時にサッと足を出した。

鏡子は、マチを転ばす気は、さらさらなかった。

ちよつとチョツカイを出しただけで足を引っこめるつもりだった。いや、実際引つ込めた。

しかし、マチは、そつと転んで。派手にコケた。彼女から手を？いや、足を出してくるのをマチはずっと待っていた。

もちろん。転んだのはシミュレーションである。

マチにとっては、鴨がねぎを背負^ぢつて、ダシ昆布まで加えて、やって来た様なものである。

お返しとばかりに、軽く”アイアンスペシャルローリングキック”をお見舞いしてやった。もちろん本人にはない、鏡子のカバンにだ。

一応ヒーローである。

「ざまあ味噌汁だ！」

マチは器用にも小声で叫んだ。

「うるさい2枚で980円の特売パンティーめ」
不器用な鏡子は、呟いた。

マチのキックの際に、鏡子はマチのパンティーが見えていた。

マチの履いていたのは、女子高生としては珍しい、高校の最寄りの駅前のスパ^せー”正油ストア”の衣料品売り場で、毎日特売で売っている素朴なパンティーであつた。

なぜ知っているかは、鏡子も持っているからである。

鏡子は、内心、マチに怪我がなくて安心した。

張り合う元気をなくした、彼女は、そのままカバンを拾って家に帰って行った。

そして今日、鏡子は学校を休んだのだ。・・・。

学校を休みがちであるとは言え。

<つづく>

5袋 君のパワーは10万N《ニュートン》（マチに告ぐ直ちに変身せよ）（前

マチは、鏡子を救うべくマッチョンに変身するのであった。

5袋 君のパワーは10万Nヘニュートン《マチに告ぐ直ちに变身せよ》

だが、既にマチは走っている。

溢れる思いを力に換えて、猛然と走っている。

もちろん家に戻って”プロテインX”を服飲し、マッチョンに变身する為にだ。

相手が、天敵であろうが、筋肉注射であろうが今のマチには関係ない。

（マチは、天敵と点滴を間違った）

苦しんでいる姿を黙って見ていられる程、図太い神経はしていない。

精々、シュミレーションで転んだ振りをして、相手に非を作るのが精一杯である（？）

早くマッチョンに变身しなくては。

早く鏡子を助けなくては・・・やさしいが鏡子の彼氏も一緒に・・・。

マチの正義の心がアスファルトを蹴り、風を切る。

マチの走り去った後には、つむじ風が舞い、草木がなびく。

そして、花びらが舞い、犬が吠える。

マチが全速力で、家に戻る中間点をやや過ぎた辺りであった。一生懸命走るマチを、物凄い勢いで追い抜く小さな影がある。

（えっ、誰だ？）

背泳のバサロの様に影だけを見せて、いきなりマチの2 m位先に浮かび上がってきた。

誰だ！

その影の正体は？

正義の使者かそれとも、非なる者が。

逆光の中、啞然とするマチに背を向けた姿が次第に顕になってきた。

その姿は？

何と！

小さなマツチヨンサポーター、美乳の菜茅であつた。

いつものおっとりとした態度からはとても考えられない、回転の速いフットワークと板バネの様な鋭いキックで、地上を駆け抜ける。

マチも決して脚が遅い方ではない。

それなのに、積んでいるエンジンが”おまえのとは違う”と言わんばかりの物凄い一気の加速で、マチを抜き去り、今、マチの目の前で勇猛に風を切り裂いている。

普段のトロさが、演技ではないかと思えてしまう素早さである。

（くそ）なっちゃんめ、おっとり症候群だったか！

ここ十数年前から若い女性に根付いた

（おっとり 〃 可愛い）

をベースとしている症候群だ。

何の躊躇いもなくおつとりを実践する”偽者おつとり人間大集合”かと思うと、マチは無性に騙されたと言っ気持ちにショックを隠せない。

社会で演技をして許されるのは、役者と営業マンだけだと思っているマチには、余りに身近過ぎる裏切りであった。

それでも、（多分）懐が広いマチは、
（まーいいか、これから接し方を変えよう。素早い行動を要求してやろーっと）
そう思い、いとも簡単に自分を納得させることに成功した。

実は、余計なことに血液を回している余裕は無かったのだ。とても急いでいるのである。

マチが、息をきらし自宅に到着した時には、菜茅は笑顔で出迎えてくれた。

「お帰りなさい」

あれだけの全力疾走で、息も切らさずにおつとりとした口調を維持出来ていることが、マチの気にやや障った。

（くそ、何って言う心肺能力なんだ！）

イラッとした。

その瞬間、頭が働いた。

（いつか、なっちゃんに”プロテインX”を治験してみよう。正義の

為に！)

そう思うと、マチの脳裏に” なっちゃん ”の姿が浮かび上がり不覚にも” ニンマリ ”とした顔になってしまふ。

しかし、マチの嫉妬と企みとは裏腹に、菜茅はそんな難しいこと等は一切考えていない。

本能に忠実だ。

「マツチンどうしたんですか。早くマツチヨンに変身して下さい」

菜茅は、素早いことに既に才色兼備茶を用意している。

しかも程良く冷えているのである。

これには、走った後のマチには堪らない。早く飲みたくなってしまう。

それを受け取ると、自分の部屋に行き、真つ赤な財布から” プロテインX ”を1袋取り出し、封を切る。

毎回真一文字に切れる切り目は、今日も見事に美しい。

マチは、それを、満足げに眺めると頷いた。

「うん、今日も縁起がいい」

そして、“ 彩色兼備茶 ” 300mLのペットボトルに内容物を入れると、シャッフルだ。

泡立つ。

が、そこでマチは気が付いた。

今のところ何の怒りもないのである。菜茅への嫉妬ぐらいでは変身出来るとは思えない。

どうしよう、このままでは、マツチヨンに変身出来ない。
鏡子を救うことは出来ない！

マツチン、危うしだ。

いや、マチは危うくない。

危ういのは鏡子である。

この際、しょうがない。

鏡子の日頃の行いに怒りを立てるしかない。

マチは鏡子相手であれば、何時でも何処でも幾らでも怒ることが出来る。

助ける相手を怒ることに対して矛盾を感じながらも、日頃の素行の悪さに対しあれこれと回想を始めた。

いや、あれこれは必要なかった。

存在自体に腹が立つ。そう、あの”焼きそばパン事件”以来ずっ
とだ。

マチは怒りは瞬時に頂点に達した。

「何で、鏡子を助けなければならないんだ！」

すると、マチは段々助けに行くのが面倒になって来た。

しかし、程よく冷えた才色兼備茶の魔力には引き付けられる。

「マツチン」

そこに菜茅が呼んだ。甘い声だ。
心地よいおっとり口調。

本当はマチも、おっとりが好きなのである。

好きなのだが、周囲を気にし過ぎのマチの性格が邪魔をして、素直に表現することが出来ないのである。

その為、実は俊敏であった菜茅がいとも簡単に”おっとり口調”を使いこなすのがシヨックなのであった。

マチが気持ち良く笑顔で振り向く。

「ん？、なゝ・・・」

「・・・に」

と、マチが口を閉じるよりも素早く、よく”プロテインX”がシャッフルされた才色兼備茶300mLペットボトルの口を、菜茅はマチの口に押し込んだ。

そして、マチを押さえつけ顎を持ち上げると、程よく冷えた才色兼備茶の魔力には勝てやしない。

「ばっちん、ごぼごぼ、やゝべでゝゴボゴボ」

と言いながらも、進んで喉を潤してしまう。

普段、表面上隠していた菜茅のせつかな性格が出てしまう。
一気に飲ませようとしてしまう。

華奢な体とは言え、4歳上の菜茅のパワーは侮れなかった。

菜茅の容赦の無い行動に抵抗が出来ず、口元からお茶がこぼれ出す。

マチは、結構な息苦しさを感じる。

今度の怒りの矛先は菜茅である。

「あつ、マッチンごめんなさい」

菜茅は、マチの様子に気づき慌てて手を放した。

「なっちゃん」

と、マチが真っ赤顔をして怒鳴った瞬間、身体も赤みを帯びて来た。

途端！

心の熱き正義感が血流に溶け込み、猛スピードで全身を駆け巡る。

「ま、まずい！」

学習能力の無さに頭が痛くなってくる。

が、しかし、今は、私服だ脱ぐのも簡単。

あっという間に、2枚で980円パンティー1枚に。

今の衣装の総額は490円だ。

グwwオーン

両肩、腕、胸が、そして、お尻とお腹に太腿が・・・。

全身が心地よく締め付けられ、そして、ずしりとした重量感を感じる。

体は心地よく軽い。

ざ、ざーん。

体中に漲るパワー。

少々熱苦しいが、”絶快感”

変身！

左手を斜め前45度に掲げ、指先までピント伸ばす。右手は肘か

ら曲げ、左手と平行に。両足は軽く膝を曲げ、しっかりと安定させたポーズを取る。

マッチョン推参 Oh、Yey！
¥（・・）／『横書きのみ対応』

今日は衣類に被害がなし。

いや、あった。490円が伸び切っている。

これは必要経費で、菜茅に落としてもろう。

マチはそう思った。

菜茅は、既に何処から用意したのか青いポリバケツに、マチの脱いだ衣服を既に詰めていた。

これまた何処で用意したのか、覆面型の毛糸の帽子を後ろから強引に被せてくる。

工場のライン作業の様に素早い行動だ！

続いて、毛糸のマフラーをふんどしの様にマチの腰に締めると、マチは引き締まった大臀筋を力強く叩かれた。

「パチン」と小気味良い音が部屋の中を響き渡る。

関取がお腹をたたく音が、両国国技館に響き渡る様にだ。

すると、その後には甘い頬ずりが待っていた。

嫌味な位にすべすべな頬が、マッチョンに変身したマチの大腿二頭筋またくを弄る様に良く動く。

すべすべな感触が、帰って悪寒が走る程に気色が悪い。

気色悪さが燃料となり、青いポリバケツをぶら下げたマッチョンロケットが二階の窓から発射された。

屋根伝いに現場に直行だ！

- 約7・5秒後 -

現場に到着。

改めて、マッチョン推参！！

現場から最寄の民家の屋根でいつもの決めのポーズを取るが、あいにく誰も気付いていない。

夜道で、転んだ時に照れ笑いをして後ろを振り向いた時に誰もいなかった時の様に恥ずかしい。（例えが長い）

もしかしたら、本当は人気が無いのではないかと心配しながら、とぼとぼと遠慮がちに

マッチョん、チョん、チョん。

と、3歩で車の脇まで降りると、歓声が上がった。

マチは、喜びにもう一度ポーズを取ろうと思ったがそんな状況ではない。

体勢が悪く体に負担が掛かっている様だ。

一刻の猶予もない状況だ。

しかし、ここからどうするかだ。

取り敢えず青いポリバケツを地面に置くと、ドアを引き抜こうと

したが後から追いかけて来た”ナツチヨン”いや、菜茅がマツチヨンに静止を掛けた。

「マツチヨン駄目」。もつと車が潰れるかもしれない。麒麟さんの首を持ち上げて」

マチは、首を縦に振ると、分つたとばかりにクレーンの先を持ち上げに掛かった。

数十センチ持ち上げれば、車を押し出すことが、出来るのだ。

マチはクレーンの首の下に入ると、力一杯持ち上げにかかる。体がきしむ程に重い。

マチは全力で持ち上げ様とした。

だが、鋼鉄の麒麟の首は、軽く揺れる程度でびくともしない。

鏡子の苦しそうな声が耳に響いてくる。

くそ、マツチヨンのパワーってこんな程度なのか、銃弾を弾き返した体はこの程度のものだったのか！

マチの心には、自問の言葉が反響していた・・・。

<つづく>

5袋 君のパワーは10万N≪ニュートン≫（アル・リとチャル・バーの融合）

マッチョン危し、鏡子を救えないのか。
しかし、更なる力が・・・。

5袋 君のパワーは10万N≪ニュートン≫（アル・リとチャル・バーの融合）

駄目だ！鋼鉄のキリンの首（大型クレーン）は全く持ち上がる気配を感じられない。

集まった人たちは祈る様にマチ（マッチョン）に注目をしている。

（どうしたのマッチョーン、マッチョンの力ってそんなものなの〜）
マチは弱気になりそうになる。

しかし、諦めない。

心の絶叫を飲み込み、砕けそうな心に気合いを入れる。
内股になりかけた大腿四頭筋を開き、再び風にさらす。
乾いた風が湿った股間に気持ち良い。

しかし、鋼鉄のキリンの首は横になったままである。

（このままじゃ、何のために出て来たのか分かんないじゃないか〜、
恥ずしいだけだ〜）

恥だ！恥だ！颯爽と登場して、何も出来ないなんて、ヒーローとして最も恥ずべきことだ！

そうなのだ、マチに取って最大の屈辱。

マチは次第に腹が立ってきた。
力の足りない自分ではない。

クレーンの重さにある。

（ちつくしょう。いい晒し者じゃないか）

重さと、恥ずかしさで顔が真っ赤かである。覆面の陰で見られることはないのであるが……。

一瞬過った重さへの絶望が、怒りへと変わる。
恥ずかしさへの怒りが爆発だ。

そうだ、悪いのは一つ。クレーンの重さだ！

重さへの怒りのパワーが筋肉に張りとお艶を与えてくる。

広背筋と腹筋には見たことがないボコボコなこぶが整然と並び、
上腕二頭筋と大腿四頭筋には新幹線が走れそうな位の鋼鉄のような
筋が浮かび上がる。

背中“マッチョン”の文字が“強調文字”に変わった。
その時……。

「ギシ、ギシギシ……」

マッチョンの筋肉の軋む音ではない。
今度は、クレーンが軋む音だ。

やったー、マチの短気が幸したのだ！

巨体の鋼鉄のキリンが少しずつ首を持ち上げていく。

町内の運動会以来の歓声が起こる。

「マツチヨン、マツチヨン」

手拍子が起こる。

町内の民謡大会以来だ。

「マツチヨン、マツチヨン」

マチは調子に乗る。

「ベロンチョベロベロ〜！」

マチが叫ぶと、ついに重量上げの選手のように高々と鋼鉄の麒麟の首を持ち上がった。

「うおー」

凄い歓声が上がった。

菜茅もつるつると感動した目付きで見ている。

本当はマツチヨンの力が見たかっただけで、扉を開けさせなかったのだ。

しかし、それどころではない。

「は・や・く」

細々としたマツチヨンの声に、野次馬達が一斉に車を押しにかか
る。

マチの兄も押している。

だが、車は動かない。

つぶれた車は、シャーシとタイヤが擦れ合って微動だにしない。

マチの頭は、ようよう白くなりゆく。

「視界は少しあかりて、むらさきだちたる面が心細くたなびきたる」

マチが、訳の分からない言葉を呟きだした。

マツチヨンは限界間近だ。

危うしマツチヨン。

「危機はマツチヨ 力のいる時はさら也 潰れた車には猶マツチヨの多く飛びちがひたる」

マチがそう呟いた時だ。

そこに助けがやって来た。

力に自慢の近所のボディビルクラブの”マツチヨ”の面々が飛んでやって来たのである。

「やあ、それ」

彼らが上半身のシャツを脱ぎ捨てると、選手交代だ。

全員が入れ替わると、彼らのパワーとチームワークは圧巻であった。

掛け声に合わせて押しだすと、車が軋んだ音を立てながら少しずつ動き出した。

鏡子の乗った車は次第に加速がつき、あっという間にクレーンの下から退避することが出来た。

それを見て、マツチヨンはクレーンを降ろし、荒い息のまま車の扉を引き剥がした。

- まもなく -

二人は救出された。

その時鏡子は虚ろになりながらも、マッチョンのふんどし代わりのマフラーの隙間からパンティーを見た。

(正油^{せいゆ}ストアーの2枚で980円・・・)

匂いフェチの彼女は、マッチョンに抱き上げられながら、こんな状況下でもしっかりとマッチョンの匂いも嗅ぎ取っていた。

(あれ、マチの香り?)

甘い良い香りがする・・・。

(もしかして・・・マチ? 内股にホクロが・・・)

鏡子はマッチョンがマチの親戚であると解釈したながら気を失った。

内股のホクロが、やけに目に焼きついた。

一方、休出に成功した男達は? いや、男達と女子高生1名は、打ち合わせもなく得意げに道路の中央に列を組んだ。

マッチョとマッチョンのコラボのボーシングだ。

その中心は当然マッチョンである。

菜茅がどこから持って来たのかCDプレイヤーから音楽を流す。
曲目は、”^{マイコーシヤク}舞子釈さん”の”スイマー”である。

(ジャンラ、ジャンジャジャン、・・・)

競泳用の様なビキニパンツ一枚になったマッチョ男達と、毛糸のふんどう姿のマッチョンが、慌てて音楽に合わせ、泳ぐようなボーシングで舞を披露する。

彼らが、鏡子と彼女の彼氏が緊急車両の中でいち早く駆け付けた救急車によって搬送されるのを舞で見送ると、見物人達から歓喜の叫びが飛び交った。

町内会の盆踊り大会以来の盛り上がりだ。
その盛り上がりも最高潮を迎えた時であった。

水を差す影が盛大に近づいて来ていた。

盛大にやって来ていたのだが、歓喜の陰に隠れていて近くにくるまで誰一人として気づかなかった。

それは、マッチョンを狙う緊急車両軍団である。
それに逸早く気づいたのは菜茅であった。

「警察よ、マッチョン逃げて！」
菜茅の声がマチの耳に入ってきた。

一瞬逃げようと思ったマチであったが、思いとどまった。

（ちょっと待って、何で？）

そうなのだ、今日は疑われることすらしていないのだ。
幾らなんでも、鋼鉄の大型キリン（大型クレーン車）を倒したとまで疑うとは、とっても思えない。

しかし、警察は、マツチヨン目掛けて突撃体制に入っているのが手取る様に分る。

自分の周りのマツチヨ男達は、既にシャツを着ており、下着1枚なのは（実際は、2枚重ねだが）マツチヨンだけであった。毛糸の覆面帽子まで被っている。

やっぱり見た目に怪しいのは間違い無い。一目瞭然である。

また、事件に関係した不審者と疑われている。

「冤罪だ」

マチは叫びながら逃げた。

青いポリバケツは、しっかり持っている。

マツチヨ軍団は、それを整然と見送る。ただ、変に巻き込まれたくないので、マツチヨンを助けようと盾になってくれる者は、今回は見物人を含めて誰一人としていなかった。

みんなは、マツチヨンが逃げ切れると樂觀視して楽しんでいるのである。

「マツチヨン、時間が無いのよ！きんかわ、くりとり、はしたない、あそこで、またけい むかいざえもん 向左衛門、行くの助よ」

菜茅が意味不明な言葉を叫んでいる。

そうだ、変身が解けるまでに時間が無いのだ。しかし、全くを持って菜茅の言っていることの意味が分らん。

（はあー？何なのよ、それ）
と一瞬思う。

普段で有れば意味が分らないままであろう。

だが、切羽詰まったことにより、火事場の馬鹿力ならぬ馬鹿頭が働くのであった。

（そうだ、暗号だ！）

菜茅は他の人に知られない様に、マチだけに分るように暗号で叫んだのだ

（普通、わからないよ）

とマチは、思うが分ってしまっていた。

火事場の馬鹿頭で。

こう言う意味だ。

「マッチョン。近所の川の、栗取りをした木のある橋下は誰もいないから、あつ、そこで待ったら（自慢の）軽自動車で向かいに行くから」

そう言う意味である。

マチは、逃げた。

川に向って。

「スタコラ サッサー」と・・・。

- 3日後 -

鏡子は、コルセットをして登校した。

ろっ骨にひびが入った程度で済んだとのことであった。

彼女は、胸に負担がかからない様に肘から先だけで、ご免ライダ

ーの変身ポーズを取り、マチに
「Sorry」
と誤った。

マチもそれに、変身ポーズで応える。

彼女は、本物の”ご免ライダー^{ソーリー}Sorry”になった・・・

今、マッチョンによつて、バーチャルとリアルが融合したのだ。
マチと鏡子二人の共通の世界が出来上ったのである。

鏡子はヒーローお宅では無い。本物のあからさまのヒーローファ
ンになった。

誰の目もはばからずバーチャルを愛した。

ヒーローを馬鹿にする者は、マチに変わつて成敗する。

マチもリアルの世界で彼氏が出来る。

流かと思つたのだが、それはずっと先になりそうである。

この後、二人は長い友人となる。

しかし、マチが気になるのは、鏡子はマチに誤つた後にウイנק
をして来たことである。

（どう言う意味だろうか？まさか・・・）

家に帰ると、

兄もマッチョンの大ファンになり、筋トレを復活させた様だ。

母と二人で家中にマッチョンの写真を貼りまくっている。

提供元は主に菜茅であるのだが、そのことはマチには内緒である。

< つづく >

5袋 君のパワーは10万N《ニュートン》（アル・リとチャル・バーの融合）

替え歌禁止令で11話はカットしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6423j/>

ザ・マッチョン

2011年9月12日09時40分発行